
最弱の強者

夢火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱の強者

【Nコード】

N5071F

【作者名】

夢火

【あらすじ】

この物語の主人公は誰か？——その問いは些か愚問と呼べるものだろう。約束を護る為に全てを欺く最弱の少年も、過去を取り戻そうと必死になって足掻こうとする強者の少女も、復讐を果す為に生きる全てを失ったあの男も、元の世界への帰還を願うあの学生も、皆が全て主人公なのだから——

プロローグ的な世界設定の紹介（前書き）

はじめまして。色々と未熟な点がありますが、頑張っていきたいと思います。

ブローグ的な世界設定の紹介

人は能力者と無能力者の二つのカテゴリに分類される。

能力者とは人の身で在りながら神の奇跡を起こす事の出来る才能のある者。能力の有無は生まれた時に決定し、それ以降での能力の発現は確認されておらず、また、親の遺伝等は関係ないとされている為、具体的な発現条件は未だに不明である。

とある宗教的な一説によれば前世に神に尽くした人間の魂が昇華し、ちから能力を得て生まれ変わったとされているが定かではない。

一方、無能力者とは才能のない神に見捨てられた者の事。才能のある能力者達は無能力者を常に侮蔑の眼差しを向け、無能力者はこの能力者達が繁栄した世界では世間からの態度や扱いすらも酷いものだった。

世界最大級の領土と文明を誇るリアナ大陸にある帝都ラフラ・ローレは世界随一の能力者至上主義国家であった。

そこは能力者達が政治・宗教・技術を独占し、学習面では初等部から国の主義を学ばせ、まさに世界随一の名に相応しい能力者の為の国であると共に、無能力者に対しての強固な態度も世界随一である国だ。

そんなラフラ・ローレにはやはり能力者至上主義らしく、ある制度があった。

『能力別階級制度』、通称『スキルランク』と呼ばれるその制度は個人の能力の強弱に合わせ、E、D、C、B、A、Sとランク別に分類され、さらにその中で数字で順位付けされる制度である。

この制度で定められた階級で上位に位置する者は家柄、年齢等を無視して『力ある者』として世間から認められ、Aランク以上になると帝都以外の都でも権限を持つ事ができ、その権限は並の貴族を遙かに上回る程である。（帝都以外と言っても、無能力者主義の国家は除くが）

ランクは基本的に生まれた時に有する能力によって決められ、主に軍事的価値のある能力が重宝される。

だから、ランクAの能力者になるとその単体戦力は小国程度なら一人で制圧でき、ランクSにも為れば数人居れば一晩も掛からずリアナ大陸の八割は死地と為す程のバケモノ揃いである。

つまり、生まれた時に決められるこのランクは『余程の事』がない限りランクの上下変動がない。

そして数字による順位だが、これは同じランク内での優劣を決めるもので、順位を上げる条件が『自分より順位の高い能力者と公式戦を行いそれに勝つ』というものだ。

帝都ラフラ・ローレの現・トップ、クライス・ローレ帝はこの制度により、能力者同士を競わせ、一般都民の兵力的強化と能力解明の為のデータ収集を両立させた。

帝都ラフラ・ローレは一見、能力者に優遇された環境の都のように見えるがその実態は低い能力しか持たない能力者達が毎日のように繰り返す喰うか喰われるかね泥沼化した状況だった。

そんな人間同士の醜い欲望のぶつけ合いの中に、とある少年と少女がいた。

少年の名は恋斗・タリナス^{レント}

リアナ大陸の人間とその東に位置する島国の人間とのハーフ。灰色

の髪と島国特有の黒寄りのブラウンの瞳が特徴の常に柔らかい笑みを浮かべるお気楽スマイル少年。とある目的を持って少女と共に行動する『自称・無能力者』

スキルランクEの最下位。

そして年上の恋斗を常に使い走りにする唯我独尊のツンツン少女、名はミナカ・イルピリス。一年半前に失った記憶の手掛かり（らしい）恋斗と共に過去の記憶を探す少女。

金髪ショートヘアの髪を揺らしながら澄んだような蒼い瞳は今日も恋斗をパシらせる。

スキルランクAの第四位の風使い。

この荒んだ世界を舞台に二人の記憶と目的の旅が始まる。

最弱と強者

帝都ラフラ・ローレ、その北部に位置するセレナ地区は主に民間人が住まう煉瓦造りの家が並ぶ洒落た雰囲気放つ街だ。

このセレナ地区の大半の住民が一般家庭を持つ人間なので、市場や酒場、衣装店等の『衣食住』が整っており、貿易の方面も帝都内の他の地区と異なり積極的に遠く離れた国から仕入れた珍しい食材が市場でよく並ぶ事が多い。

その為、この能力者至上主義の帝都内では珍しくセレナ地区の市場では無能力者の人間も見かける事が出来る。

そんなセレナ地区のとある市場でとても一人では持てそうにない程の大量の食材が詰まっている大きな紙袋を抱き抱えた灰髪の少年が自分の前を手ぶらで優雅に歩く金髪のショートヘアの少女をみて疲れ気味の苦笑を浮かべながら歩いていった。

「ちょ……、ミナカさん、いくら何でも買いすぎですよ……ていうか少しくらい自分で持ったらどうです？」

少年、恋斗・タリナスは自分より頭一つ分くらい背の低い目の前の少女に訴えるように声をかけた。すると、少女は足を止めて大袈裟なくらい大きなため息を吐いた。

「まったく……ホント、アンタって使えないわね」

普通の人間なら簡単に堪忍袋の尾がプツンと逝くような返事を返した少女、ミナカ・イルピリスを見て恋斗はそれを馴れた様子で肩をすくめ、黙っていれば可愛いものを……、とミナカの整った顔を見ながら心の中で呟く。

「だいたいアンタ、ランクEの最弱とはいえ一応、能力者でしょ？
それくらい一人で持てない筈ないでしょうが……」

紙袋を持った女性のような細い腕をぶるぶると震わせながら今にも
限界が来そうな恋斗にミナ力はうんざりとした口調で再びため息を
吐いた。

「いやいや、仮に能力者だとしてもこの量は無理ですって！ それ
に何度も言ってるじゃないですか、俺は『無能力者』だって！」

うそつけ、とミナ力は思った。

そもそも能力者に優劣と階級を与える為にあるスキルランクに登録
されている者はどんな雑魚でも必ず能力者なのだ。いくらランクE
の最下位とはいえ、何かしらの能力は使える筈なのに、ミナ力は約
一年半も一緒に行動を共にしてきた目の前の腕をぶるぶると情けな
く震わす男が能力を使っている所を一度も見たことがない。

「ああ！もうっ！ ホンツトに役に立たずね！」

先程からチワワのように震え続ける恋斗に痺れを効かせたミナ力は
恋斗の持つ紙袋に右手を向けて軽くヒョイと人差し指と中指を上
に動かした。

すると、紙袋を覆い被さるように小さな竜巻が現れ、紙袋を宙に浮
遊させた。

「いやあゝ流石、ランクAの第四位！ そんな芸当、ランクEの雑
魚であるワタクシにはとても出来ませんよゝゝグヘッ！」

挑発しているのか誉めているのか分からない誉め言葉を言ってパチ

パチ」と拍手をしながらいつものニコニコスマイルを浮かべる恋斗にミナ力は取り敢えず脇腹にスイカサイズの風の塊をぶつけて黙らした。

まったく……何で私はこんな使えない男と行動を共にしなければならぬのだろうか

ミナ力はそこでこの男と行動を共にする理由を再度、頭の中で確認する。

ミナカ・イルピリスは一年半前以降の記憶が一切ない。そして最初、目が覚めた時に崩壊した荒れ地の真ん中に居た自分とその場で最初に出会ったのが血塗れの格好をしたこの灰髪の少年だったのである。

恋斗はミナカについて何も知らないと話していたが、この男の言葉はどうも胡散臭いので、こうして少しでも記憶の手掛かりを探す為と恋斗の正体を掴む為に一年半行動を共にしてきたのだが……

ホントにただの使えない男なだけかも、という考えが最近になってミナ力の中で思い浮かんできた。

「ミナカさん、どうかしましたか？」

いつの間にか復活していた恋斗は沈黙状態に入っていたミナ力の顔を覗き込んでいた。

「ふんっ、何でもないわよ」

ミナ力はそこで思考を中断し、自分の隣に竜巻で浮遊させた紙袋を移動させて再び歩き始めた。恋斗は置いていかれないように直ぐ様

その後を追いつける。

「さてと……大方、買い物も済みましたし、そろそろ次の仕事、始めます?」

仕事、とはスキルランクの登録者、『ランカー』に依頼される任務の事である。スキルランクは帝都や帝都外で起きた『能力者でしか対応出来ない仕事』を解決する何でも屋のような役割も果す制度でもある。

任務はランカーの能力に添ったものが用意され、ランクSにもなると国家機密レベルの仕事も任される事があるらしい。

これにより、過激なランカー同士の喰うか喰われるかの泥沼化した今の現状であっても、このスキルランクによって能力者事件解決の均衡を保っている世間は安易に批判する事が出来ないのだ。

そしてミナカと恋斗は一年半前の当時の時期に起きた大きな事件等に少しでも関係のありそうな依頼を積極的に受けて記憶の手掛かりを探している。

「そうね、何か有力なモノはあるかしら?」

また仕事か、とやや落胆気味に心の中で愚痴を溢しながらミナカは後ろで何十枚もの資料に目を通していき恋斗に尋ねた。

「うーん、当時の事件等に関係のありそうなものは特には……あ、ありました! これなんてどうです? ちょうど場所も近いようですし」

恋斗はそう声を上げ、何十枚もの資料の中から一枚を取り出して紙を宙に投げた。そのヒラヒラと落ちる紙を地面に付く前にミナカが風を操ってそれを自分の手元に持ってきてそれに目を通す。

「えーと、ダムクライツファミリーのボス、セヴィラ・ダムクライツの捕獲、及びファミリーが売買している無能力者奴隷の解放……」

資料を見つめるミナカに恋斗はいつものニコニコスマイルを浮かべながら補足説明を始めた。

「ダムクライツはちょうど一年半前くらいに頭角を表した新参の能力者主体のマフィア組織で資料に示されている奴隷売買等で短期間に傘下を拡大したところですよ。まあ、この任務ではミナカさんの記憶の手掛かりは薄いと思いますが……一応、他の任務も——」

「これにするわ！」

再び資料の束に目を通そうとした恋斗の視線はその言葉で直ぐにミナカにやった。

するとミナカは自分を見て固まる恋斗にビシッと右手の人差し指を差し出し、金髪のショートヘアを風で靡かせながら高らかに言った。

「アンタ、私の性格知ってるでしょ？　たいした能力もない雑魚が調子に乗って力を持たない人を傷付けるのが大嫌いなもの！　こんな外道ども、私が速攻で一人残らず地獄に送ってやるわ！」

こうなったミナカはもう止まらない。それを知っている恋斗は手元の資料を腰のポーチにしまい、やれやれとため息混じりの笑みを浮かべた。

「分かりました。では、次の仕事はそれに決定ですね。まあ、俺も

同じ無能力者としてその人達を助けたいと思いますし」

だからアンタは無能力者じゃないでしょうが、とツツコミを入れようとしたミナカだったが、恋斗がやけに真面目そうな笑みをしていたのでそれに呆気にとられてしまった。

まあ、真面目そうな笑みなので基本的には笑みに変わりはないのだが、恋斗にとっては笑みはディフォルメなので案外、真面目なのかも知れない。

「さあ、行くわよ恋斗！」

ミナカは鬼退治にさあ行くぞとばかりに力強く前を歩き始め、それを後ろから眺める恋斗は

「はい」と返事をした後ミナカに聞こえない程度の声で呟いた。

「……………まっ、アレがうまく『餌』に食い付いて来れば一番いいんですが……………」

ツンツン少女と任務開始

セレナ地区の市場等がある民間地から少し離れた海岸。その港の周辺を鉄格子で区切った膨大な敷地には貸倉庫のようなシャッターのある小さな建物が点々と幾つも並び、周りには赤や緑の色をしたコンテナが積み木のように何段も重ねられ外側から見える敷地の視野を狭めていた。

夜闇に浮かぶその港の敷地を区切る鉄格子から少し離れた木々のところに姿を隠しながらミナ力と恋斗の二人は居た。

「成る程、ダムクライツの表向きは大陸外の国との貿易に使われる港、となっていますが……ミナ力さん、これを見て下さい」

恋斗は敷地の方を見てそう言いながら自分の使っていた双眼鏡をミナ力に渡す。

「……ええ、明らかに警備が厳重過ぎるわ。これじゃあ自分で何か隠していますって教えてると同じよ」

ミナ力は恋斗から受け取った双眼鏡を覗いてみて、上から下まで全身黒で揃えた格好の屈強そうな数人の男が敷地の出入口や鉄格子の周りを囲むように警護している姿を確認して双眼鏡を恋斗に返した。

「まあ、見たところ警備の方はミナ力さんなら十分に突破できそうですね」

恋斗は相変わらずの笑みを浮かべたままミナ力から返された双眼鏡を腰のポーチにしまって、そこから今度は折り畳まれた紙を取り出

し、紙をミナカにも見えるように地面に置いて広げると紙には敷地の見取り図が書かれていた。

「作戦としましては今回ののは二手に別れた方が得策かと俺は思います」

恋斗の言葉にミナカは素直に首を縦に降って肯定を示した。

依頼先の場所の見取り図や敵戦力、それに見合った戦術まで情報面のあらゆるスタンスは主に恋斗が請け負う役目でこれに関しては普段、彼をパシリにしているミナカでも余り口を出さない。恋斗の情報能力はランクAの彼女自身が不本意ながら舌を巻く程のレベルである。

恋斗はミナカが頷いたのを確認して説明を続ける。

「二手に別れる理由は今回の目的が二つある事からです。セヴィラ・ダムクライツの捕獲と売買目的で捕らえられた無能力者奴隷の解放。捕獲のみならば、ミナカさんが居るので派手にやっても問題ありませんし、奴隷解放のみの場合でも俺が作戦を立てて隠密行動でやれば問題のないものなのですが、二つ同時クリアとなると話しは別です」

「確かにそうね。派手に動けば捕えられている人達に危害が及ぶ可能性も出てくるし、だからといって隠密行動でゆっくり時間を掛けている内にターゲットに逃げられる可能性もある」

「賢いですね」言いながら話しを理解している様子のミナカの頭を撫でようとした恋斗だったが、ミナカによって後頭部に空気の塊をもの凄い勢いで叩き込まれて撃沈した。

「イテテテ……冗談はさて置き、具体的に二手に別れる作戦ですが至極、簡単な内容です」

恋斗は頭を擦りながらやや涙目の状態で会話を戻した。

「簡単、ね……それで、その内容は？」

ミナカの方も先程の事でジト目で恋斗を見ていたが話しの内容が戻ったので気持ちを切り替えて会話に応じる。

恋斗は地面に広げた見取り図にペンを走らせ、図に二つの矢印を書いた。

「役割で言えば、ミナカさんが捕獲で俺が捕えられている人達の解放です。あと、内容と言いましても敢えて言うならミナカさんは出来るだけ『派手に』暴れて下さい」

その言葉に最初は頭に？を浮かべ疑問に思っていたミナカだったが常時よりもややニコニコ具合の高い意味ありげな恋斗の笑みにピンと答えが浮かんだ。

「ちょっとアンタ！！まさかこの私を図に使う気！？」

図と分かってから徐々に怒りのボルテージが上がりつつあるミナカに「バレちゃいました？」とニコニコ笑顔を崩さない恋斗。

「勿論、ちゃんとした理由はあるわよね？もし単に自分が楽しただけで私を図に使うなんて言うなら……」

怒りゲージが満タンになる寸前のミナカは手のひらで竜巻を起こしながら恋斗に迫り、恋斗はそれを引き釣った笑みを浮かべながら後

るへたじろぐ。

「り、理由ならちゃんとあります。ですから先にその物騒なモノを手のひらで作るのは止めてくれませんか？」

その言葉を聞いて舌打ちをしながら仕方なく手のひらの竜巻を消したミナ力だったが不機嫌な事に変わりはなく、次に何かヘマをすれば確実に風の刃で体をバラバラにさせると恋斗は目の前のランクAを見て感じ取った。

「まず囿の件ですが、二手に別れて行動する為には必ず必要です。それにランクEの俺よりもランクAのミナ力さんの方が適任かと――」

「ランクEの『自称・無能力者』でも敵の的になるくらいはできるでしょ？」

恋斗の説明をミナ力是不機嫌そうな声で遮る。

恋斗の冷や汗が脂汗に変わりそうなくらい今のミナ力は危険だった。

「……………」

両者の間にやや沈黙が続いたものの堪えきれず先に声を発したのは恋斗だった。

「ハア………… 本当の理由は正直、余りミナ力さんに話したくなかったのですが………… 仕方ないですね」

その言葉にジト目で恋斗の顔を睨んで何か言おうとしたミナ力だったがそれを言う前に恋斗が口を開いた。

「いいですか？ ミナカさん。元々、無能力者というのは全般的に能力者を嫌っている、もしくは能力者を良く思っていない人が大半を占めています。」

今回、捕られているのは能力者の手によって住んでいた世界を無理矢理奪われ奴隷にされた無能力者達は特に能力者を恨んでいる事でしょう。だから考えてもみてください。

そんな人達が能力者の……ましてや上位クラスのあなたに助けられたところで彼らにとっては何の救いにもならないんです。

だから、『無能力者』の俺が彼らを救出するんです。その為にも俺は囷になれないし、ランクEの最下位がターゲットの捕獲を成功させる事も不可能です」

そこまで説明したところで恋斗はミナカの顔に視線を向け、反応を待った。

「……………分かったわよ」

張りのない返事が返されたがそれは先程までの不機嫌だからという理由ではない。ミナカは落ち込んでいたのだ。

そもそも、能力者至上主義の帝都の能力者は無能力者の為になる事など普通は行わない。

だが、ミナカはそんな帝都の掲げる主義を無視し、自らの意思で力なき人達を助けると決めたのに、自分ではそれを救う事が出来ないと言われたのは相当ショックだったようだ。

そんな落ち込む彼女を見て恋斗はそっとミナカの頭を撫でた。

普段は年下のミナカのパシリをしていてどっちが年上か分からないくらいだが、こういう時は彼が年上のお兄さんだと端から見ても感じ取れる。

「あなたが落ち込む理由なんて何処にもありません。それに、ランクEの俺には無理でも、ランクAのミナ力さんになら出来る事があるでしょ？ ミナ力さんは俺の分までダムクライツの連中にしっかりと制裁を下してやって下さい」

余り見せない優しさの込められた笑みを浮かべる恋斗に頭を撫でられる行為がだんだん恥ずかしくなってミナ力はブイツとそっぽを向いた。

「そ、そんな事、別にアンタにイチイチ言われなくても分かっているわよ……」

「フフツ、ならいいです」

ミナ力の頭を撫でる手をそっと離して恋斗は広げていた敷地の見取り図を畳んでポーチの中に入れてチャックを閉めた。

「さてと、そろそろ行くのでしょうか。」

さつき説明したように二手に別れての行動です。俺が別口から敷地に侵入、ミナ力さんは正面突破で可能な限り敵の目を引き付けながらターゲットを捕獲して下さい。俺も救出が済み次第そちらに合流します。まあ、俺が行ったところで足手まといになるのが関の山でしょうが……」

恋斗は冷えるからと言ってミナ力の肩に被せていた黒いローブを返してもらい、それを羽織ってフードを顔が確認出来ない程度に深く被る。

「では、先に俺は別口に向かうのでミナ力さんは俺の姿が確認できなくなったら正面突破を始めて下さい」

そう言つて立ち上がり、恋斗は走りそうとミナカに背を向けたが、
「おっと、一つ言い忘れてた事がありました」と言つて 振り返つた。

「囿になれと言つた俺が言つのも何ですが、無茶だけはしないで下さいね……」

それだけ言つて恋斗は夜が生み出す闇の中へ走つて姿を消して行つた。

「……バカ」

一人だけになつた草むらで先程まで自分に被せられていたローブの温もりが残る肩を抱きながら呟いた言葉はランクAの能力者ではなく、一人の少女としてのものだった。

ツンツン少女とターゲット（前書き）

ずいぶんと間が開いてしまいました。（・・・）
るだけ早く更新出来るように心掛けます。

次からは出来

ツンツン少女とターゲット

ミナカ・イルピリスはランクAの第四位、能力は『視界領域に存在する空気の掌握』だ。

上位ランクの能力者はその威力もさることながら、それがもたらす効果範囲もかなりの距離を誇る。

とはいえっても確かにミナカも目に見える範囲なら能力を使用出来るが、彼女の有する『空気の掌握』は他の能力の中でもかなり正確さが要求される能力で、その時の天候や風向き、土地の影響、絶妙な力加減等を全て精密にコントロールして始めて絶大な威力を発揮できる。

だから実際にミナカがランクAとしての本領を真に発揮できる範囲は精々、歩幅百歩分程度である。

だが、ミナカにとって歩幅百歩分は十分過ぎるくらいの範囲だった。

「うわあああああ！！！」

ミナカが指をヒョイと動かすだけで人が宙を舞う。

「グアア！！！」

ミナカを囲っていた黒づくめの男達の一人がボーガンを取り出して引き金を引くが、矢はミナカに当たる前に彼女の周りを覆っている風の障壁に阻まれ、更には風によって矢は軌道をあらぬ方向へ変えて突き進み別の黒づくめに刺さる。

ミナカが正面突破を開始して約五分。その手際は余りにも大胆だった。

まず最初に門の見張りをしていた男達に放った『死なない程度の』
竜巻が門と周りの鉄格子ごとを破壊し目立つように敷地に侵入。因
みに竜巻が放たれた場所が地面を丸々削り取られたよう抉れている
光景は本当に『死なない程度』の竜巻だったのか疑問に思える。

そして敷地の侵入と共に風の絶対防壁を自分の周りに展開して、後
は優雅に散歩をするかのようにして一直線に敷地の中心へと歩いて
行く。本来なら積木のように乱雑に配置されたコンテナが迷路のよ
うな道を作り出して真っ直ぐには行けない筈だが、ランクAの彼女
にとってそれらは何の障害にもならない。

最初、ダムクライツの連中もコンテナを風で吹き飛ばしながら散歩
の足取りで自分達の敷地を一直線に進む少女という色々と異常を越
した侵入者に困惑を隠せなかったが裏世界^{フロ}の人間としての直感がミ
ナカを危険と察知して迎撃に出た。
そして今に至る。

「あゝもつつ！！ 雑魚はいいから早くアンタ達の親玉を出しなさいよ！」

ミナカは自分の周りを囲む黒づくめの男達にイライラしながら怒鳴りつけた。正直、ランクA（強者）の彼女が格下相手に死なない程度に手加減をして能力者を使うのはけっこうストレスが溜まる。

まあ、実際には自分の周り以外の酸素濃度を調整して酸欠を引き起こして気絶させる方法もミナカにとっては造作もなく簡単に出来るが、あくまでも今回の自分の役割は囷。無能力者奴隷の開放をしている恋斗に敵の目がいかないように出来る限り派手に戦わなければならない。その事もあって余計に彼女をイライラさせていた。

だが、相手がそんな彼女の愚痴に耳を傾ける筈がない。いや、正確には絶大な風の力を操る正体不明の侵入者を前に耳を傾ける余裕など彼らにはなかった。

いくらダムクライツファミリーの構成員が皆、能力者で構成されていると言ってもランクAの能力者相手ではこの反応は当たり前なのだ。

「まったく！ 人の話しくらい聞きなさい！！」

どうやら今のミナカの前ではその当たり前の反応すら許してもらえないようだ。

イライラした感情をそのまま表したような暴風がミナカを中心に巻き起こり、彼女を囲っていた数十人単位の間人がつむじ風に吹かれた落ち葉のように宙を舞い、縦に飛ばされた者はそのまま重力落下で地面に落ち、横に飛ばされた者は周りのコンテナに体がぶつかるまで勢いよく地面と平行に飛ぶ。

ミナカが放った強力な風を受けた者は全員がぐったりとしているが、それでも彼らに死者はいない。

門の時に死なない程度で竜巻を放ったのもそうだが、基本的にスキルランクの任務では相手が悪党であつても死人を出してはならないと決まっているからだ。

能力者の蔓延る世界の『力の均衡』を保つのも目的の一つであるスキルランクのランカーが自己の命が危機に陥った時の正当防衛以外で無闇に死人を出せば、それこそ『力の均衡』は本末転倒である。

スキルランクはあくまでも個人が能力を私利私欲に使うの阻止する為に能力を使用する。これを掲げるからこそ、帝都が発した制度で

あっても上位クラス的能力者は帝都外でも大きな権力を持つ事が出来るのだ。

だが、それは所詮『表向きは』であり、裏では上位クラス的能力者を使って非能力者国家の要人を暗殺するなどが任務にもある。

ミナ力はその性格からしてそのような仕事は絶対にしないし、受けた事もない。

しかし受けた事はないといっても記憶を失った一年半からの話しであり、今のミナ力は過去の自分がどんな人物か全く知らない。

だからミナ力は自分という人物を知る為に記憶を求め、一年半前に失った記憶に関わりのありそうな情報を手当たり次第に探している。

今回の任務を受けたのも、無能力者達（力なき者）を奴隷にするダムクライツの連中が気に入らないという個人的な感情理由もあるが、一年半に出来たこのファミリーがほんの僅かでも自分の記憶の手掛かりになる事を知っていれば、という藁をすぎるような思いも含まれている。

「ふう、派手にやりすぎちゃったかしら……」

風で黒づくめの男がめり込んだコンテナや亀裂の生じた地面が広がる辺り一面が災害に遇ったかのようなその光景にミナ力は思わずため息を溢した。どうやら先程の一撃でミナ力の周囲に居たダムクライツの連中を一掃してしまったらしく、ミナ力は被害に遇った場所のちょうど真ん中にポツンと一人で立っていた。

（まあ、恋斗の方に敵が行かなきゃいい話だから別にいいか……）

そう思いつつも、やはり囿にしては少しやりすぎたと感じたミナ力は改めて能力の制御に心掛けようと考えた。

「……アイツの方は無事かしら」

一人になった敷地で何気無く口から出た言葉の内容に気付いてミナ力は直ぐ様、首をブンブンと横に振って顔を若干赤くした。

（な、何考えてるのよ、私は……！ 大体、なんで私がアイツの心配なんて……）

己の中で何かと葛藤し続けていたミナ力だったが、その時。

「ほう……どんなじゃじゃ馬が俺の敷地で派手に暴れていると思ったら、まさかこんな小娘だったとは……」

「……！！」

突然の声に警戒の色を強めたミナ力は声がした方向の前方のコンテナを咄嗟に見た。夜の所為で余りはつきりと見えないが、その人の輪郭を捉える事が出来た。

「……まさか、ターゲットの方からみすみす出てくるとは思ってたかったわ。まあ、お陰で探す手間が省けたわね。セヴィラ・ダムクライツ」

「ハハッ、小娘よ、目的は俺の首か？」

最初は輪郭しか捉える事が出来なかった人物の姿が雲掛かっていた満月の光に照らされた事によって明らかになった。

年齢は大体、三十代前後、髭をたくわえて年期の入った顔立ちは裏世界としての威厳を放ち、髪型は銀のオールバック。身に付ける衣服は黒づくめの男達が着ていた物と同じようなデザインだが、ボタンなどが純金で装飾されている。

「大方、スキルランクの任務で俺を捕えに来たランカーと言ったところか」

セヴィラはそう言いながら目の前に地面で倒れ込んでいる部下の腹を蹴り飛ばして、ミナカの方へ一歩ずつ近付く。

「ふんっ、わかってるなら話しは早いわ……」

ミナカはそんなセヴィラに軽蔑の眼差しを送りながら両手に風の渦を生み出す。

「アンタの歪んだ根性、私がこの手で肅正してやるわ！」

ニコニコ少年と奴隷少女

「ハハッ、流石、ミナカさん。想像以上に派手にやってくれますね」

港に面した鉄格子で区切られた膨大な敷地を誇るダムクライツの敷地内に幾つかあるシャッターの付いた倉庫の一つ、フード付きの黒いローブを羽織った恋斗がその一角の影に身を潜めていた。

恋斗は先程から聞こえる激しい風の音と八つ当たりに近いとある少女の怒鳴り声に、思わずその少女の相手をしているダムクライツの連中に心の中で少しだけ憐れみを送りながら苦笑した。

「さて、俺もそろそろ自分の役割を果たさないとミナカさんに怒られるな……」

恋斗はそう呟きながらフードを被り直して、頭の中に入れてある敷地の地図を思い浮かべながら小走りで移動を開始する。

恋斗が向かったのは敷地の中心地よりやや東の辺りに位置する、他の二倍近くある大きさの二階建て倉庫。恋斗が仕入れた情報に寄れば其処に捕えられた無能力者の人々が監禁されているらしい。

その倉庫に向かって恋斗はコンテナの影を次々に渡りながら近付いて行く。

恋斗の羽織っているローブは黒色。普段、特徴的で目立つ彼の灰色掛かった髪も今はローブに付いたフードで隠されている為、今の恋斗の姿は完全に闇に溶け込んだ状態だ。それに加え、ミナカが派手

に暴れてそちらにダムクライツの目が行っているお陰で恋斗は楽に移動が出来た。

だが、そうやって楽に移動が出来たのも倉庫の周辺までだった。

「流石に囷で手薄になったとは言え、倉庫周辺の警備は健在か……」

倉庫の正面のコンテナの裏に隠れながら恋斗は困ったような笑みを浮かべながら肩を竦める。どうしたものか、と言わんばかりに。

倉庫までの距離は歩幅にして約三十。ここから確認出来る警備の数は四。流石に気付かれずに中に入るのは難しいか……

「……ここにミナカさんは居ない。まあ、それなら方法もない事はないですが……」

そう呟きを溢しながら恋斗は自分の右手に視線を落とす。

「いや、まだ別の方法もある筈です……」

首を振って右手に落としていた視線を元に戻して、思考に入る。

だが、恋斗がそうやって思考に入る前に警備をしている黒づくめの男達の方が先に動きがあった。

シャッターの前を警備していた男達四人が誰も喋っていない筈なのに急に誰かと話をしているかのように相槌を打ち始めた。

（ダムクライツの情報伝達は能力者による思考伝達系統の能力か……）

恋斗は警備の男達が取った行動を見て直ぐにそう判断した。

能力者が使用する力は幾多もの種類があり、細かく内容を分ければその種類の数は能力者の数と同じものになるほどだ。

そして能力をかなり大まかに分けた中で五感、あるいはそれに属さない第六感で遠く離れた相手に情報を報せる種類の能力が思考伝達系統だ。

（あれは恐らく、任意の相手に自分の思考を直接、脳に報せるタイプ……かな？）

恋斗が疑問系なのも能力の種類が例外があるにしろ、ほぼ人それぞれだからだ。

男達は相槌が終わると同時に四人は集まって何か指示を出し合った後に敷地の中心方面、つまりミナ力の居る方向へ走って行った。

走っていく際に男達が恋斗の隠れているコンテナの横を通ったが、その時に恋斗はちょうど男達を通った反対側のコンテナの側面に移動し、入れ替わるようにして倉庫に向かった。

「ホント、ミナ力さんの働きは俺の想像以上ですね……これが終わったら今度、ご褒美に彼女の好きなスイーツを作ってあげましょうか」

倉庫のシャッター前まで来て、騒ぎ声の聞こえる敷地の中心を振り向きながら恋斗は今もお、大暴れしているで在ろうランクAの少女を思い浮かべた。

「まっ、ご褒美なんて言葉を使えば、『子供扱いするな！』とでも

言って怒るでしょうが……」

恋斗は怒りながら風で自分の体を吹き飛ばそうとしてくるミナカの姿を容易に想像出来き、そして思わず苦笑の笑み。

「さてと、冗談は置いといて捕えられた人達の救出といきますか……」

固くシャッターの閉ざされた倉庫の中に入る為、恋斗は正面ではなく、倉庫の側面の直ぐ側に三個くらい積み上げられていたコンテナに向かった。そしてその積み上げられていたコンテナの一番上まで上り、そこで初めて倉庫の二階にあるガラスと肩を並べるくらいの高さになる。

ガラスからは書斎らしき部屋が見え、ここから見た限りでは誰も人が居ないようだ。

「俺はミナカさんと違って派手にやるのは余り得意じゃないんですけどね……」

恋斗はコンテナの上でギリギリまでガラスまで距離を取って両腕を顔の前でクロスさせて構える。

ガラスとの距離は大体、助走を付ければ届く距離。

「せーの、とー!!」

恋斗は掛け声と同時に脹ら脛に力を思い切り込めてコンテナを蹴って走る。

そしてコンテナの上で付けた勢いを保ったまま、ガラスに向かって飛び込む！

パリンッ！！

勢いよく飛び込み過ぎた所為で書斎と思われる部屋にあった机にぶつかり、その上に束ねられていた書類の山が一気に宙を舞って床に倒れ込んだ状態の恋斗に降り注ぐ。

「イタタタ……流石にちょっと無茶し過ぎましたか……って、あれ？」

突入の際に腰を机にぶつけたようので恋斗は腰に手を当てながら起き上がりながら周りを見渡した時にそれに気付いた。

「な、なんなんだお前は……！！」

どうやら、部屋は無人ではなかったらしく、ソファーにはまだ二人ほど人間が居た。

片方はなぜかパンツ一丁のむさ苦しいオッサン。先程、恋斗に言葉を放った方だ。

そしてもう一人は面積の小さい布一枚で作られた衣服と呼べるかどうか怪しい服装の裸に近い腰の辺りまで伸びた黒髪の少女。

「あゝ、その……」

「……………ッ！」

取り敢えず、何か話題を振ろうとして少女の方に声を掛けようとした恋斗だったが、直ぐに目を逸らされてしまった。

その時、逸らされた少女を見て恋斗はその黒真珠のような瞳に涙が溜まっていることを知った。

改めて事態を確認する。

裸に近い少女。

その傍らにむさ苦しいオッサン。

そして此処には捕えられた無能力の人達が居る。

この男が少女に対して何をしようとしていたのか、という答えを導くのは直ぐだった。

「あゝなんか、すみませんね……お楽しみ中の邪魔でしたか？」

恋斗の口調は軽いもので何時ものニコニコ笑顔だったが、何故かおぞましい雰囲気を漂わせているようにも見えた。

「く、来るな!!」

この男も能力者だったのだろう。男は目の前の突然、現れた正体不明の少年が生み出す違和感に堪えられず、右手を向けた。

「! ダメ、逃げて!!」

隣の男がどんな力を使うのか知っていた少女は恋斗に初めて言葉を出した。

だが……

「！ な、何で力が使えねえんだ！！？」

男は何度も手を向けて何かをしようとするが、何度やっても何も起らない。

そしてその間にも恋斗は一步步、それであって確実に男に近付く。

「……全く、脆いものです」

果たしてその言葉は誰に対して、或は何に対して言った言葉だったのか、無能力者の少女と能力者の男には分からなかった。

そして腕を伸ばせば手が届く程の距離まで近付いた恋斗は男を無視して、こちらを震えながら涙の溜まった瞳で見つめる少女の頭をそっと撫でる。

「少しの間、眼を閉じていてください」

「……え？」

戸惑いを隠せない声を思わず出してしまった様子の少女だったが、優しさの籠った声を掛けられながら頭を撫でられる行為で恋斗に対する警戒心が無くなり、それどころか安心した心地好い気分になまって少女はゆっくり眼を閉じた。

「ヒイ……！！？」

先程から何度も力を使おうとしても使えない。そんな状況が男をさらにパニックにし、直ぐ側まで近付いていた恋斗から逃げ出そうとしたが、男は腰が抜けてしまっているので上手く立ち上がれない。

「ホント、哀れですね……能力者という生き物は」

恋斗はニコニコの笑顔のまま、腰が抜けて床に垂れ込む男の額を軽くこずいた。

「……もう、開けてもいいですよ」

そう恋斗に言われて少女が眼を開けた時、部屋にあの男の姿はなかった。

ニコニコ少年と王道的ラブコメ展開

少女は眼を開けた後、驚いた様子で先程、自分の貞操の危機からまるで物語のヒーローのようにタイミグよく現れ、守ってくれた目の前に居る黒のローブを羽織った恋斗を眺めた。

(……この人からは恐さを感じない……それに、私を助けてくれた)

少女は最初と違って完全に目の前の恋斗への警戒心を解いていた。どんな人か、と興味が沸いて顔を覗こうとするものの、ローブに付いているフードを深く被っている所為で少女は顔や表情をはっきりと確認出来なかった。だが、さっきの頭を撫でながら掛けられた優しい声は若い男性のものだと少女は判断出来た。

暫くの間、ずっと黒ローブを見詰めたままの少女だったが、さっきまで自分の隣に居た少女にとって忌々しいあの男が消えている事態にふと気が付いた。

「あ、あの……」

少女はやや緊張の籠った声色で黒ローブに話し掛けようとしたが、思ったように声が出ない。だが、そんな少女よりも先に黒ローブの方から会話を持ち出された。

「ああ、あの男の人ならあなたが眼を閉じている間に何処かへ行ってしまいましたよ。トイレにでも行ったんじゃないですか？　いく

ら秋とはいえ今日みたいに冷え込む夜にパンツ一丁では体が冷えてトイレに行きたくもなるでしょう。いやゝ困ったオッサンですねゝアハハハ……」

黒ローブは手を後頭部に置きながらどこかふざけた口調でそう切り出した。明らかに怪しい。

「……………」

どうやら黒ローブは何かを誤魔化そうとしている。詳しい意図は分からないが直ぐにそう感じとった少女は取り敢えず黒ローブをジト目で見る事にした。

「はははっ……流石に誤魔化せませんか……先に言っておきますけど、さっきの出来事を誰にも話さないでくれませんか？　こちらにも色々事情があるので」

少女のジト目に堪えきれなかった恋斗はやや疲れたような苦笑をして少女にそう言った。その言葉に少女は一瞬、首を傾げるものの直ぐにコクコクと首を縦に振って肯定を示した。

「……良かった、ならいいです。では本題に入りますが、その前に……………」

そう言っただけ恋斗は自分の羽織っていた黒のローブを面積の少ない一枚の布で出来た服しか身に付けていない裸に近い状態の少女の肩に被せた。

「まあ、その……そんな格好では風邪を引いけませんし……何より俺の目の行き場所に困るのでそれを着ていて下さい……………」

ローブが無くなり、隠れていた灰色の髪、黒掛かった瞳を持った中性的で整った顔立ちが露になった恋斗が黒髪少女の姿を指摘しながら頬を赤く染めた。普段なら困った時でも苦笑を浮かべる彼だが、今回は本当に困ったような表情をしている。年下のミナカの前では余裕を見せる恋斗も、自分と同じ年ぐらいの美少女が相手だとその余裕もなくなるようだ。

「……あつ、えつと……ありがとう……」

少年の言葉に改めて自分のしていた格好を思いだし、恥ずかしさで少年と同じように頬を少し染め、さらにフードの下に隠れていた少年の顔を見て少女の顔はボンツと音が出そうなくらい真っ赤になった。赤くなつた理由として後者の方は照れではなく、また別の意味合いのものだろう。

「それにしても酷い人達ですね、ダムクライツファミリーというのは……」

あなたのような可憐な女性を襲おうとするなんて」

「……ふえ？」

恋斗にしてみれば、ダムクライツの批判と少女に対する心配について口にしたつもりだっただろうが、本人が居る目の前でしかも御世辞ではなく、本心で『可憐』などという言葉を使ったのは少女にとっては、やや刺激の強いものになってしまった。

「あれ？……何だか顔から湯気が出てるようですけど大丈夫ですか？」

プシューと音を立てて湯気を顔から放出する少女に恋斗は心配そ

うに困った笑みを浮かべた。

「えっ！？　だ、大丈夫です！　何でもないです……はい……」

少女は何とか顔の火照りを冷まして心配する恋斗にそう答えて俯いた。

「ならいいですが……では本題に――」

「あの！……その前にちよつと……」

何か言いたげな表情で少女は恋斗が言葉を言い切る前にそれを遮って恋斗の瞳を見ながら口を開いた。

「どうかしましたか？」

少女の様子に気付いた恋斗は紳士のような優しい口調でそう尋ねた。

「……………まえ」

「……………？」

少女は俯きながらボソツと呟いたので恋斗はそれを聞き取れなかったようで、少し首を傾げた。

「名前！　あなたの名前を……その、教えて下さい……」

今度はちゃんと、はっきりそう言った少女は再び頬を染めて恋斗の瞳を真っ直ぐに見詰めた。先程からよく頬を赤く染めるこの少女を恋斗は『恥ずかしがりや』と考えている様だが、恋斗に対する少

女の様子を鋭い人から見ればそれは違うと直ぐに判断できる。

「……恋斗、俺の名前は恋斗・タリナスです。」

まあ、”恋斗”なんてファーストネームは大陸内じゃ、ちょっと変わった名前ですが、あなたの国では然程、珍しくもない筈ですよ？」

恋斗は何時もの笑みで少女に自分の名前を告げながらそう付け足して返した。

「！ どうして私が東の出身だと分かったんですか……？」

少女の方は返された返事に驚いた表情をして恋斗の顔を見たが、恋斗にそれを笑顔で見詰め返され顔を真っ赤にした。

「大陸の出身の人間は皆、髪色が派手ですからね。俺のは少し違いますが、あなたのような純粋な黒をしている人は殆んど東が出身なんですよ」

そう言っただけで少女の腰まで伸びた黒い髪に手を伸ばして撫でられた事によってオーバーヒート状態に突入した少女の反応を楽しむ恋斗は自覚を持ってやっているのか、それとも無自覚でやっているのかは彼の常に浮かべる笑みの表情を見ても判断しにくい、無自覚なら相当、罪作りの男である。

まあ、自覚を持ってやっているにしてもタチが悪い事には変わりはないが。

「そ、そうなんですか……あつ！ 申し遅れました。私は睦月と申します」

睦月と名乗った少女の顔は未だに赤いものの、その状態で恋斗にぺこりと擬音が付きそうなくらい行儀の良いお辞儀をした。

お辞儀をした際に垂れた東の国特有の黒髪の間から覗かせる、やや幼さが残った可愛いらしい顔。

前屈みになった体制では、睦月の大きめの胸の双丘が強調され、それに加えて睦月の格好は恋斗からローブを渡されているとはいえ、そのローブは肩から羽織っている程度なので前から見れば、あの面積の少ない布切れ一枚で強調された豊富な双丘の先端が辛うじて隠れているという非常に際どい格好であった。

そして恋斗は思わず、目の前に居る睦月と彼の知るとある少女を頭の中で比較してしまった。

（ああ、なんとという事でしょうか。どこかのランクAさんとは正反對ですね……主に礼儀の良さと性格、何より体のある部分が……）

ちよっぴり鼻の下を伸ばしながら睦月の強調された体の一部をさりげなくロツクオンしている辺りはこのランクEもやはり年相応の男の子なのだろう。

だが、そんな彼の間抜けた表情も突如、外から聞こえた『ドンッ！』という大きな音で直ぐに消えた。

「ッ！ 何だか外が騒がしいようでしたが……恋斗さん？」

音についても首を傾げた睦月だったが、さっきの音を聞いて黙り込んで何か考えて事をするような表情をする恋斗を見てそちらの方が疑問に感じた。

「……どうやら、早めに役目を果たした方がいいみたいです」

突き破った硝子窓から次々入って来る先程のような大きな戦闘の音。恋斗は窓から音のする方向を眺めながら内心、少し焦っていた。

（さっきよりも大きな音……ターゲットが出てきたようですね。ミナ力さんに限って心配は無用だとは思いますが……）

恋斗の仕入れた情報によればターゲットであるセヴィラ・ダムクライツの能力者としての実力は精々、ランクBの上位程度とのことだったので、ランクAのミナ力で在れば大丈夫だと実践でいたのだが、どうにも胸の中にある不安が拭えない。

杞憂かもしれないが、それでも、もしもの事を考慮して恋斗は救出を早く終わらせてミナ力の元へ向かう事に決めた。

「睦月さん。本題に入りますが、俺がここに居るのはダムクライツによって無能力者奴隷として捕えられたのあなた達を救出する為です。」

今、仲間が連中の目を引き付けているので、その間にあなた達は全員逃げて下さい。退路は俺が確保してあります」

睦月にそう説明して、『さあ、あなたもここから逃げましょう』と彼女に手を差し伸ばした恋斗だったが、説明を聞いた睦月は恋斗の手を取る前に口を開いた。

「あの、恋斗さんは何か勘違いなされていませんか……？」

「……勘違い？」

早くミナ力の元へ向かうと睦月に催促していた恋斗はその言葉に反応して眉を竦めた。

「私達はダムクライツの人達に……いえ、セヴィラさんに捕らえられたのではなく、保護されていたんですよ……?」

「……………はい?」

強者と強者

一般的に能力者の戦い方と剣や銃等の武器を用いた戦い方は根本的な面で異なる。

武器の場合、その形状を見ればその攻撃方法やリーチ、威力等が大体見て分かるが、能力者の場合はそれら全てが状況に応じて変化可能な物も在れば、見ただけでは判断出来ない、むしろ見る事すら出来ない不可視能力が付いた攻撃方法も存在する。

そんな枠に捕われない戦い方が出来るからこそ、無能力者の人間は例えばランクEの能力者が相手であってもそこに戦力差が生じる。

なら、その”枠に捕われない者”同士の戦いではどのような部分で戦力差が出て勝敗を決するかと言うとそれは単純に”能力の質”だった。

質とはつまり能力の純度であり、例えば質の高い能力者が生み出した蠟燭に灯る程度の小さな炎であっても、質の低い能力者では洪水になる程の水量を編み出しても炎は決して消す事が出来ない。尤も、質が低い能力者では、力の規模にも制限が出てくるが。

スキルランクでは確かにランクを決める際に軍事価値の高い強力な能力が重視されて付けられると同時に、それは必然的にランクの上位に位置する能力者は皆が質の高い能力の持ち主だという事が分かる。

スキルランクの制度で順位が変わってもランクが変わらないのは、この質が大きな理由である。

これらの事を踏まえて考えれば、ランクAのミナカがランクB程度の実力とされるセヴィラ相手に苦戦するなんて理由はある筈がな

い。

だが、実際にはランクAはランクBを相手に苦戦を強いられていた。

「ハッ！ さっきまでの勢いはどうしたア！ 小娘！！」

雲掛かった満月の淡い光に照されるは、対峙する二人の能力者。二人が対峙する周囲に目をやれば、コンクリートの地面は所々削られ、積み木のように重ねられたコンテナは無作為に飛ばされ、色んな方向でそこらに転がっている。

「……クッ！」

ミナ力は自身の周囲に発生させてある風を機動力にして後ろに下がり、悠然とした態度で迫り来るセヴィラと距離を取りながら腕を十字に振るって生み出した巨大な風の刃で横と縦の方向から同時にセヴィラへ攻撃を仕掛ける。だが……

「邪魔だ！」

そう言っただけセヴィラは手に持った背丈程の長さを誇る両刃剣を迫り来る十字を型どった風の刃に向かって軽く斜めへ振り上げる。

キン……

その瞬間、風の刃と両刃剣の衝突部分からまるで鈴でも鳴らしたかのような透き通った金属音が響き、それと同時に風の刃が何処へともかく消滅する。

「……チツ！　なら、これは――！」

風の刃が消されたのを見て舌打ちをしたミナ力は直ぐ様、自分との距離を詰めようとするセヴィラに両手を向け、今度は彼の前後左右に四、五メートル級に圧縮された荒れ狂う竜巻を出現させ、四方向からの同時攻撃を仕掛ける。

「まったく、懲りねエ小娘だな……何度もやっても――」

セヴィラは余裕の笑みを浮かべながら剣を持つ左手の手首を使い、柄をくるりと回転させて逆手に持ち変えて、腰の位置で剣を構える。

「――効かねエんだよツ――！」

逆手に持ち変えた事と居合い切りに似た構えにより横に振るう力が強くなり、勢いを付けて加速した刃がセヴィラの周囲に出現した竜巻の腹に横一閃。

キイイイイン……

すると、今度は先程の鈴のような金属音が重なり合うように長く鳴り響き、セヴィラを囲む前後左右、四つの荒れ狂う竜巻がまるで何もなかったかのように跡形もなく消える。

「ツ！　これもダメなの！？」

目の前で起きた光景に愕然としたミナ力は体の動きを少しだけ鈍らせてしまう。勿論、セヴィラの鋭い眼光はそこに出来た隙を見逃さない。

「ハハッ！ 止まってる暇なんてあるのかよ、小娘エ！！」

「！！！」

かなりの長さを誇るセヴィラの両刃剣がミナ力を捕らえるのには、瞬時に距離を詰める事の出来る踏み込みを一度するだけで十分だった。

（防御を……っ！！）

刹那、斜め下から空気を切り上げる音を聴いたミナ力は自身の周りに展開した風で防御をしようとしたが、襲い来る凶刃は鈴に似た音を立てながらそれを無効にする。

（クッ、防御がダメならっ！！）

ザンッ

セヴィラは剣を切り上げた時に宙を舞った物を見る。
それは血ではなく、衣服の破片だった。

「チッ、避けられた上に反撃まで喰らうとはな……」

セヴィラは忌々しげな眼でミナ力のいる方を見ながら、さっきの攻防の一瞬に付けられたと思われる頬の切り傷から流れる血を指でなぞった。

風を使ったのか、先程までセヴィラの目の前に居たミナ力は既に十メートル程、距離を取っていた。

「ハア、ハア……」

緊張が解けきれてない表情で肩で息をしながらミナカはセヴィラをしつかりと睨み付ける。服の真ん中をバツサリと切られて胸元が見える隠れした格好だが今はそれを気にしている暇はない。

あの時ミナカは回避に成功したものの、普段、風の護りで体を覆っているミナカは避けるという事をしない彼女が敵からの攻撃時に咄嗟の判断で回避をするというのは少こし無理があつたようで、まさに紙一重で避けれたようなものだ。

だが、ただ単にランクAはやられてばかりではなかった。ミナカはさっきの一連の出来事である点に疑問を感じていた。

（あの剣……防御に使った風を切り裂いた時、音の他に少しだけ光っていた……）

セヴィラの握る長身の両刃剣を見つめながらミナカは更に思考する。

（それに、回避際に放った咄嗟の風は無力化されなかった……？
もしかして、奴の能力は……）

「成る程、風使い（エアマスター）か。それも実力はランクAの上位と言ったところ……」

ミナカはセヴィラの言葉に思考を一旦、中断して彼の動作を警戒しながら見る。

すると、セヴィラは左手で逆手に持っていた剣を再び手首を使っ

て回し、逆手持ちのスタイルを止めて今度はしっかりと両手で柄を握って構えた。

「……だが、残念だったな小娘。
俺を能力で倒すならランクSぐらいの化け物でも呼んでくるんだな
っ！」

ダンツ、と地面を強く蹴りあげ、勢いを付けながら上段突きの構えで向けられた鋭い剣先の矛はミナカへと突進して行く。

（もしも、奴の能力が私の仮説通りなら……）

風の刃、前後左右からの竜巻による同時攻撃、と立て続けに攻撃を無力化されたミナカは迎撃よりも、回避の方を優先した。

（試してみる価値はある……！）

だが、回避を選んだミナカよりも先にセヴィラが踏み込みの動作に入った。

「もらったア……！」

剣を握り直し、鋭く研がれたセヴィラの刃の間合いがミナカの体を捕らえて襲い掛かる。

（この距離じゃ、左右に避けても直ぐに追撃が来る！ それならっ
！）

ヒュンツ、と剣が空気を切る音が鳴ったがそこにはミナカの姿が居ない。

「なっ！……上かッ！」

一瞬にして視界から消えたミナカの居場所を直ぐに突き止めたセヴィラが顔を上げると、そこには満月を背景に照らされたミナカが風を纏いながら拳サイズの空気を圧縮した小さな球体を放っていた。

「チッ！ 何度もやっても同じだ！」

セヴィラは瞬時に剣を構えて球体を迎え撃とうとしたが、球体の進行方向はセヴィラではなく、彼から二、三步辺り離れた位置のコンクリートで出来た地面だった。

「！ ハッ、どこを狙って——」

「残念だったわね、狙いはそっちよ！」

圧縮された空気の球体は地面に触れると同時にシャボン玉のように弾けると、中から凝縮された膨大な空気の塊が溢れた。

「何ッ！？」

暴風となってコンクリートの地面を抉りながらその破片が散弾銃のような勢いで飛び散り、凶器と化したそれが辺り一面に無差別に降り注がれた。

女の戦いと男の修羅場

「グアアアアッ!？」

咄嗟に起きた出来事に反応しきれなかったセヴィラは剣での防御も出来ないまま、体に破片による無数の攻撃を受けて宙へ飛ばされた。無論、無差別に降り注いだ破片の雨はミナカにも襲い掛かったが彼女は自身の周りに展開された風の防壁によってそれらを防いでいた。

「グッ………がア………!」

破片で身体中をボロボロに引き裂かれ、その威力でセヴィラは二、三メートル程、吹き飛ばされた後に近くにあったコンテナに勢い良く激闘した。

「その攻撃を無力化できなかったって事は………やっぱり、アンタの能力は無能力化^{キャンセラ}、しかも武器に能力を宿させる事が出来るようね」

コンテナに背を預けながらも剣を放さなず、肩膝を地面に付けながら未だ戦意を失っていない鋭い眼光を放つセヴィラに対して一片の油断もなく、警戒しながらミナカはゆっくりと地面へ降り立つ。

その時、ふとミナカはセヴィラの握る両刃剣を見てセヴィラの戦い方を思い返して怪訝な表情をした。

キャンセラ
無能力化

能力を無効にする無能力化系統は確かに稀有である事に変わりはないが、それでもランクAの能力を打ち消す事が出来る程の質を持ち、尚且つ、能力を武器に付加するという扱いの難しい戦いをするセヴィラは恐らく能力者の中でも異端の分類に入るだろう。

ミナカが特に疑問に感じたのはセヴィラの武器に能力を付加させるその”斑”^{むら}のある戦い方だった。

さつき、隙を付いて風の刃を放ってセヴィラの頬に傷が付いたのを見る限りでは、セヴィラは武器に能力を付加させていても自身には能力を纏っていないかった。

普通、能力者ならわざわざ物に能力を付加させるよりもミナカが使った風を体に纏うといった自身の体に能力を纏わせる筈だ。

確かに武器の扱いに馴れている者なら能力を付加して武器の威力を増した方が効果的な場合もあるが、あくまでもそれは炎や雷といった攻撃に向いている能力であつた場合の話であり、セヴィラのような明らかに防御向き能力なら普通に考えても武器より自らの体に纏った方が防御力が断然高い。

（それなのにコイツは武器に能力を付加させた……？

確かに、これ程質の高い無能力化^{キャンセラ}を付加させた武器ならランクSでも出てこない限り防御不可の最強の矛になるけど、これじゃまるで

……）

「ゼエ……ハア……流石に、気付いたか……」

ゆらりと静かに立ち上がったセヴィラは既に全身が傷だらけで破れた黒い衣装からは所々血が滲んでおり、足元に血の滴がポタポタ

と垂らしているにも拘らず、そんな状態で構えられた両刃剣の先はしっかりとミナカの喉元を捉えている。

「そうさ、俺の能力は無能力化。^{キャンセラ}尤も、俺の場合は、剣に能力を付加し、防御を棄てた攻撃重視の対能力者戦特化型、つまり――」

肩で息をしながら血の垂れる唇から途切れ途切れに放たれるそれは普通なら弱々しく聞こえる筈の言葉だったが、ミナカはそれに異様な程の威圧感を感じ取っていた。

「テメエ等、能力者（クソ野郎）共を殺すのに打ってつけの能力って訳だ――！」

ダンッ、と地面を踏み込んでひたすら一直線に突っ込んで来るセヴィラの動きは単調であると同時に鮮烈された隙のない動きは、まるで先程受けたダメージ等、無き等しきものだと思わされているようだった。

「フンッ、何を偉そうに……アンタだって能力者じゃない――！」

セヴィラの気迫に怯むことなくミナカはそう言い返ししながら、突っ込んで来るセヴィラに対して直ぐに迎撃の体制に入った。

（さっきよりも速い！？ だけど……！）

地面を蹴りだし、勢いの付いたセヴィラの踏み込みによるたった一步の行動範囲は刹那の間もない内にミナカとの距離を縮める。

「アンタの対処方はもう分かってんのよ――！」

さつき行った戦法と同じようにミナカは自身の周りに風を展開し、宙へ浮き、再び石の散弾を浴びせんが如く、圧縮された風の球体を今度は十数個に渡って発射させる。

狙いは勿論、セヴィラの周りにある足元の地面！

「ハッ！！ そりゃ、こっちの台詞だ。もうソイツの対処方くらい――」

カシャ、とセヴィラの握っていた両刃剣の柄の先端に施されていた髑髏の装飾の口が開き、そこから鎖のような物が出てきてセヴィラの腕に巻き付いた。

「心得てンだよ！！」

ヒュン、と風を切るような音が連鎖した。

セヴィラは柄を離し、鎖だけで固定されたと両刃剣をまるで鎖鎌を振るうような勢いで振り回し、目にも見えない速さで十数個もの風の球体を切り刻んで消滅させていた。

「なッ……ギミック搭載型の剣！？」

「ハハッ、驚いてる暇なんてあるのかよッ！！」

予想外の攻撃に驚愕を隠せないミナカにセヴィラは更に追い打ちを掛ける。

セヴィラは振り回していた剣を一旦手に持ち直し、そこから両刃剣による投擲のモーションに入った。

「そらよッ!!」

ビュッ！ と勢い良く投擲された剣は空気を裂きながらミナカに向かって一直線に飛ぶ。

（投擲は一度きりの攻撃、ならばこれさえやり過ごせば……!!）

凶刃がミナカに襲い掛かる刹那の間、ミナカは必死に活路を見い出そうとするがその間にも煌めく刃はミナカの体へと一直線に向かう。

ザンッ！

次の瞬間、刃が何かに刺さるような音がした。だが、その音は剣の刃が肉体に刺さったような音ではなく、”硬い何か”に無理矢理突き刺さったような音だった。

「チッ、破片を盾に……ッ!!」

刃が突き刺さったのはミナカの体ではなく、さっきセヴィラに喰らわせた際に出来たやや大きめのコンクリートの破片だった。

ミナカはあの一瞬で自分と剣との間に風を使い破片を移動させていたのだ。

「残念だったわね、今度はこっちの番よ!!」

ミナカは十倍返しと言わんばかりに周囲に転がっていたコンテナを手当たり次第に風で宙に浮かしてセヴィラに狙いを定めた。

「ク、ソ……ッ……！」

投擲を避けられた後も鎖で繋がれている剣を直ぐに回収して迎撃出来るかと践んでいたセヴィラだったが、大きなコンクリートに刺さった剣を回収する羽目になるとは予想外だった。

その所為で腕を鎖で繋がれた剣が錘となり、思うように身動きが取れなくなっていた。

「アンタみたいな下衆野郎はいつぱん痛い目見てから反省しなさい……！」

ヒョイ、と腕を振るいそれと連動するように宙に浮いたコンテナが一斉にセヴィラへと向かった。

「ちょっと待った！ ストップ！ ストップですミナカさん……！」

コンテナをセヴィラに飛ばす最中、突如としてミナカの耳に聞き覚えのある少年の声がした。

「なッ……恋斗……？」

驚いた事に、いつの間にかコンテナとセヴィラの間には遮るかのようにして両手を広げながら、相変わらずの困ったような笑みを浮かべながら叫んでいた。何故か、ミナカが最後に少年を見た時には羽織っていた黒いローブがなくなっていた。

「ッ！ 間に合え！！」

何故、恋斗がこんな所に急に現れて、しかもターゲットであるセヴィラを庇うような真似をしているのか分らないが、今はそんな事よりも飛ばしたコンテナが恋斗にぶつかる前に何とかしなくてはとミナカは全力でコンテナの着地点を風で逸らそうとした。

ズサアアア……

コンテナが激闘した衝撃と音が響いた。衝撃で壊れたコンテナの中身は粉末系の物だったらしく、溢れたそれらが辺り一面を砂ぼこりのように覆い、ミナカの視界をぼやけさせた。

「恋斗！！」

ミナカは恋斗の名前を叫んで粉塵を風で追い払いながらコンテナの着地点へ走った。本人は自覚していないようだが、かなり不安で曇った表情をしている。

「アイタタタ……ミナカさん！ こっちは何とか無事でーす！」

煙の中から聞こえた恋斗の声に思わずほっと胸を撫で下ろしたミナカだったが、その行動に気付いて直ぐに頬を少し赤くしながらブンブンと首を振って声のした方へと向かった。

「ったく……恋斗！ アンター一体、何考えて……」

煙が薄くなって、恋斗のシルエットを見つけたミナカはプンプンしながら恋斗に文句を言おうとしたが、煙が完全になくなってシル

エイトでなくなった恋斗のを見た途端、言葉が止まった。

「あの、恋斗さん……大丈夫ですか？」

煙が晴れ、まずミナカの目に止まったのは恋斗と同一年くらいの黒髪をした美少女。何故か恋斗の身に付けていた黒いローブを着ていて、ローブから下は靴も履いていない白い綺麗な素足が露出している。

「いやゝ大丈夫ですよ睦月さん！ 俺、こう見えても結構タフな体をしてますから、あはははゝ」

続いて目に入っただのはミナカの前では絶対に見せないようなデレデレの表情をした恋斗。

心配そうに恋斗の腕を抱き締める黒髪の少女に、恋斗は鼻の下を伸ばしながら自分の腕に密着している少女の膨らんだ体の一部をロツクオンしている。

「あれ？ ミナカ、さん……？」

ようやくミナカの視線に気付いた時、少年は固まった。

露出女？と共同戦線

「ねえ、恋斗お〜」

甘えるような猫なで声が聞こえた。

その音源がミナカだと判断するに恋斗は数秒間の時間を有しまったのは仕方ないだろう。

あり得ないのだ。ミナカ・イルピリスという少女がこんなにも無垢でキラキラと擬音が付きそうな微笑みで自分に話し掛ける行為が

「な、なんででしょうか……ミナカさん？」

思わず一步後退する恋斗。彼の傍らでは先程よりも心配そうな視線を送る睦月がオロオロとしている。

「アンタに色々と聞きたい事があるんだけどいいかしら？」

「……ヒイイ！」

背後からどす黒いオーラを漂わせながら、それでいて笑顔で近付いて来るミナカに対して、間抜けな声を出しながら生物的本能で更に大きく一步下がる恋斗。何だか今、関わったら物凄く不味いとセヴィラすらも傍観に徹している。

「まず、一つ。アンタのローブを羽織いながら腕にしがみついているその下半身露出女は何……？」

「か、下半身露出女！？」

ビシッ！ と睦月に対して指を差しながら恋斗に問い質すミナカ。

因みにこの時点で既に無垢な笑みなど崩れており、怒りで歪んだ閻魔が舞い降りていた。

睦月はミナカの放ったあまりにも酷い言い様に文句を言おうとしたが、『何か文句ある？』と言葉なしに鋭い眼光だけで一蹴され、体をプルプルと恐怖で震わせながらギュツとさつきよりも強く力で恋斗の腕に抱き付いた。

言わずと分かるようにその行為は余計に閻魔^{ミナカ}の腹を煮え切らせせるものになってしまったが……

「ひ、酷いですよ、ミナカさん。下半身露出女だなんて……彼女には睦月さんという名前がちゃんとあるんですよ」

ミナカの表情に腰を引きつつ説明する恋斗の影で顔を覗かせながら頷く睦月にイライラしながらミナカはそれを睨み付けて再び言葉なしに沈黙させた。

「それに、ミナカさんだつて胸元をバツサリと切られて、胸が見え隠れした上半身露出女じゃ……すみません、調子に乗りました。ですから両手に竜巻を作るのをヤメテクダサイ……」

土下座する勢いで謝る恋斗に対して相変わらずの視線を送りつつも、今更ながらもセヴィラとの戦いの際に服を破られていた事を思いだし、それを恋斗に指摘されて内心、恥ずかしくなってきたミナカが決してそれを顔に出そうとせず、腕組みをしながらムスツと不機嫌そうな顔をする所が彼女らしい。

又、そんな彼女を見て直ぐに腰のポーチから予備の黒いローブを出す恋斗は、やはり彼女のパートナーらしい行動だ。

「あははは……ま、まあ、とりあえずミナカさんもそれを着て下さい。話しはそれからです」

ポーチから取り出した黒いローブを苦笑した笑みを浮かべて頬を掻きながらミナカに渡す恋斗。

「ふんっ、アンタにしては気が利くじゃない……」

やはりと言うべきだろうか、それをお決まりのツンツンした態度を見せながらしっかりとそれを羽織るミナカに恋斗は再び苦笑い。

「……っで、話を戻すけど、結局その睦月って女は何なの？ それに何でランクEのアンタが危険を省みずわざわざ戦場に出向いてターゲットを庇うような真似した訳？ ちゃんと私が納得いくように――」

機嫌を悪くしながら話しを続けるミナカの言葉が急にピタリと止まった。

そしてその視線はミナカ達の周りをいつの間にか囲っていた黒づくめ達に向けられていた。

「あはは……どうやら説明は後回しそうですね」

ダムクライツは全員が能力者で構成された組織、それも戦闘員ともなればかなり実力を持つ能力者だ。

そんな連中に囲まれていても普段と全く態度を変えないランクEの最下位にミナカは呆れていた。

「ホント、あんなに減らしたのに随分な数ね……」

恋斗に向けていた視線を再び黒づくめの連中へ戻し、ため息を一つ吐いた。

ざっと数えただけで四十人近く、しかも全員能力者揃いと来たからには流石にミナカと云えど相手をするのには骨が折れる数だ。

「まあ、こつちには負傷したアンタ達のボスが居るのよ？」

下手に攻撃して自分たちのボスに危害が及ぶような真似をする筈が

――

「構えろッ！！ 小娘！！」

余裕の態度を見せながらミナカは連中に向けてそう言葉を放ったが、その途中でセヴィラが声を上げて遮った。

「え？」

セヴィラが叫んだ頃には既に黒づくめ方向から何かの能力で放たれたであろう、青い光の球体がこちらに向かっていた。

ミナカは予想外の出来事に声を上げ、一瞬だけ反応が出遅れてしまった。

「クソッ！！」

所々に傷が目立つ体で片膝を地面に付けながらもセヴィラはコンクリートの破片に突き刺さっていた両刃剣を一気に引き抜いた。

「オラッ！！」

そして流れるような動作で次は迫り来る青い光に向かって剣を投擲し、見事命中した剣は勢いを落とすことなく突き進み、剣は青い光を放った能力者の脇腹を貫いた。

「攻撃してきた！？ しかもコイツも自分の仲間……」

一連の出来事に混乱を隠せないミナカに舌打ちをしながらセヴィラはこの状況下で唯一、取り乱していない恋斗に眼を向けた。

「オイ、その白髪小僧……！」

セヴィラは剣の柄の先端から伸びた鎖を絡めてある腕を勢い良く引つ張って血の着いた剣を回収しながら恋斗の方に向かって大声を放った。

「白髪小僧って俺の事ですか？ 正確には黒が混ざった灰色なんです……」

白髪呼ばわりされ、やや硬直気味な笑み浮かべつつも恋斗はセヴィラの声に応じた。

そんな彼の後ろでは、急に始まった能力者の戦闘に震えながらしやがみ込んだ体勢をしている睦月が居る。

無能力者の睦月にとって能力者は恐怖の対象、しかも、つい先程その能力者に襲われそうになった彼女にとってこの状況はかなり辛いようだ。

「お前さんはそっちの小娘と違って、俺等の事情を知ってるようだから話しが早い。今だけでもいいから少し手を貸せ……！」

そう言葉を交わしてる間も飛んでくる能力者達が放つ様々な攻撃をセヴィラは剣を振り回しながら全てに対処していく。それを聞いて恋斗は苦笑混じりに言葉を返した。

「いや、手を貸したいのは山々なんですが、遺憾な事に俺はランクEの最下位ですので足手まといになってしまう恐れがあります。ですから、代わりにうちのミナカさんにそちらの事情を説明して援護させるので暫しの間、待ってくれないでしょうか？」

「チツ、何でもいいから早くしてくれ!!」

戦闘中にも関わらず長たらしい言葉を返す恋斗に苛つきながらセヴィラはそう言った後に黒づくめの方へ向かって一気に斬りかかって行った。

「せつかちな人ですね」

まっ、この状況では仕方ないですか」

黒づくめに突っ走って行ったセヴィラの背中に独り言のような声の大きさに呟いた後、恋斗は未だ啞然とした様子のミナカにニコニコ笑みを向けた。

「まあ、そうことですのでミナカさん、彼の援護を頼みます」

「ちょっと待ちなさいっ!!」

ポンとミナカの肩に手を乗せて『頑張ってください』と言わんばかりの顔をする恋斗に流石のミナカもキレた。

「一体全体なんなのよ、この状況は!!」

なんである連中は私達ごと自分等のボスを攻撃するのよ!? しかもあの男も遠慮なしにその手下に斬りかかってるし……ってゆうか、なんでアンタはそんなに余裕——っっ……」

早口気に怒鳴るミナカに対して恋斗はやれやれと肩を竦め、右手の人差し指を立て、そっと彼女の唇に押し当てて沈黙させた。

「お願いですミナカさん、説明は後で必ずしますので今は俺の言葉を信じて、彼と一緒にあの連中を片付けちゃって下さい」

「……………わかったわよ」

此処に侵入する前も似たようなやり取りをした二人だったが、今回もミナカの方が折れたようだ。

ミナカのそっぽを向きながらした返事を聞いて恋斗は彼女に礼を言いながら右手を引いた。

「おや？ 顔が赤いみたいですけど大丈夫ですか？」

ミナカの顔を見てそう感想を漏らした恋斗は次の瞬間には圧縮した風の一撃を脇腹に喰らって地面でダウンしていた。

「うるさいバカ恋斗！！」

不機嫌な口調でその言葉を言い残し、ランクAの少女は風を携えて黒づくめの連中へと向かった。

男の過去と贈り物（前書き）

随分と間が開いてしまいました（・・・）
今回は今までと違い、
卑猥な表現が出てきているのでご注意下さい。

男の過去と贈り物

五年前、帝都とは少し離れた平穏な小国で農業を営む夫婦の間で育った青年が居た。

やや強面の実年齢よりも歳上に見られる顔立ちで、その口調はまがり間違っても丁寧とはいえないものだったが、近所の老いた老夫婦が営む畑の収穫を手伝ったり、賊や自然災害で家族を失った子達に水や食料を与え、時には遊び相手になってあげたりと、弱き人々を見ると放っておけない面倒見の良い、周りの人々から人気のある青年だった。

そんな日々を送る彼にある日を境に悲劇が訪れた。

彼の住む国は小国とはいえ、国全体の機能を担う国王が佇む城がある。

その城と比較的、国の中では他よりも金持ちが居る城下の民家がある者がかの手によって襲撃されたのだ。

それは人の手で行われた所業とはかけ離れた光景だった。

一晩、たった一晩で城を含む城下の建設物は何百年も時が経ったように朽ち果て、灰が降り注いだ白と黒のみが広がる廃墟と化し、そこに住む人々が最期に居たであろう場所には埃に似た白い塵が積もっていた。

これ程まで人外を異した現象を起こせるとすれば能力者、それもランクS相当の力を持つ者だ。

襲撃犯の目撃情報は数少ないが、その日の襲撃が起きる前の昼頃にこの辺では余り見掛けない顔の十二か三の少年が、ちょうど被害にあった城と民家を見渡す事が出来る山に向かったとある。

不幸中の幸いといったところか、小国の中でも末端に位置する場所ので民家を構える彼と周りの住民はこの時には被害がなかった。

だが、彼にとってこの事件は不幸の引き金になった。

小国にも関わらず、この国が平穩を保っていたのは国王を中心とする政治、貿易の両面がしっかりと機能を果たしていたお陰だ。その中心となっていた国王が消えた今、国は国としての機能を完全に失い、破綻してしまった。

その後の出来事を想像するのは簡単だ。

国が所持していた領土は直ぐに隣接した近くの国に吸収され、だからといって彼等の小国の生き残りは全くの補助もなく、それどころか生き残り達を排除する為に、その国は賊を雇って彼らを襲わせた。

武器や能力者を用いる賊に対抗する術もなく、男や老人達は賊に虐殺され、女は犯され、子供達は売られた。

——なんで俺達がこんな目にあわなきゃいけないんだ？

賊達の品のない笑い声が耳から遠ざって行く。好き放題に殺し、犯し、奪い、さぞ満足なのだろう。

彼らは青年にまだ息の根があるとも知らず背を向けて帰って行く。

——俺達が何をしたって言うんだ？

顔は殴られて膨れ上がり、身体中のあちこちの骨が折れて、指先一つ動かせない。腹の傷口からは血が止まることを知らぬかのように流れる。

死神の足音はもう直ぐまで側で聞こえて来る。

——アイツ等の所為だ。俺達の国を壊した能力者達の所為だ……

！！

そう思つて拳を握りしめようとするも握れない。

今の彼には握る力がない。叫ぶ力もない。泣く力さえ、ない……

——力が、俺に力さえあれば……

願つても能力者になれる筈がないと分かっている。能力の有無は生まれた時に決まっている。自分にそれがないことも知っている。

膨れた瞼の向こうから入る、見慣れた人々の無惨な姿が彼の心を抉る。

少し前まで、一緒に作物の収穫を手伝つてあげていた老夫婦は原形を止めていない程、見るに絶えない屍と化し、笑顔が輝いていたあの若い娘達は服を裂かれ、賊達の白濁の欲望にまみれ気を失っている。

——俺に……！！

「力が欲しいの？」

突如、声が聞こえた。澄んだような少女の声が

——！　だれ、だ……？

突然の声に驚いたが、言葉を発しようとしても思うように唇が動かせず、首を何とか回して声の主の姿を捕らえようとした。

「随分と酷い……これも能力者の仕業なの？」

何とか声の主を視界に捕えることが出来た青年が目にした人物は十五、六くらいの若い少女、そしてその傍らには少女の半分くらいの年齢と思われる幼女がしっかりと腕にしがみついていた。

——この辺の住人じゃない、旅の人間か？

そう判断したのは少女の着ていた服装だった。

傍らの幼女の方は紺色のボロそうな布切れで作ったようなローブを頭から羽織っていたが、少女の方は東の国特有の『浴衣』と呼ばれる民族衣装を身にしており、この地域一帯では見掛けない格好だった。

「ねえ、お兄さん。もし力が手に入れば、あなたはその力で何がしたい？」

カラン、カランと特有の履き物から音を鳴らしてながら少女は青年が倒れている直ぐ側まで近付き、そこでしゃがみ込んで青年の顔を見下ろした。

ぼやける瞳でしつかりとの表情を捕えることが出来なかったが、青年には少女が何処か寂しそうな顔をしているように思えた。

この少女は何が目的で死にかけの自分にそんなことを問うのだろうか、それともたまたま通り掛かって興味本意で自分に話しかけているのだろうか。

まあ、いい……どうせ死ぬんだ。それくらい答えてやろう。

薄れてきた思考の中でそんなことを考えつつ彼はぼろぼろになった体から力を振り絞って震えながらに口を開いた。

「ふく、しゅう……だ……俺達を、こんな目に合わせた……奴等に能力者達に……！」

喉から声を絞り出し、青年は最後の叫びを響かせた。頬に流れて落ちる雫と共に……

「……そう、ならこれは不幸なあなたへの私からの”贈り物”」

叫び終わり、ぐったりとして反応がなくなった青年を見た後、少女は虚ろげな瞳で見詰めながら彼の額を軽く指先で弾いた。

「後はそれを使い、何をするかはあなたが決めることよ……」

それから三年半後、稀有な能力を持った男が当時、結成したばかりの能力者主体のマフィア『ダムクライツ』に入団。

その数ヶ月後、男は僅か数人の仲間を引き連れ、三年半前に隣国を吸収し領土が拡大したある国の政治的要人、王族を全て消し、実質上の国取りに成功。

マフィアによる国取りという前代未聞の成績を残したその男の実力とカリスマ性を認められ、入団から僅かな期間でファミリーのボスにまで成り上がった。

最弱と元弱者

それは戦いと呼ぶには余りにも一方的過ぎる展開だった。

恋斗に言われて渋々といった様子でミナカが戦闘に加わってから数分足らず、その僅かな時間だけで戦闘は既に終了していた。

先程まで自分たちの周りを囲んでいた四十人近く居た黒づくめの男達全員が例外なしに地にひれ伏して辺り一面は沈黙した夜の背景に戻り、一連の出来事を目にしていた睦月の表情まさに驚愕といった色で塗り潰されていた。

彼女のした事は至極、簡単な作業だ。

まず最初に『巻き込まれたくなかったら私の後ろに下がってなさい！』と言って前方に出ていたセヴィラを半強制的に下がらせ、能力影響範囲を相手の居る場所だけに絞る。

そして絞った範囲の空気の濃度を薄く調整。

それだけで後は勝手に敵が呼吸困難を起こして戦闘不能になるのを眺めるだけとなる。

無論、気絶程度なので誤って死なせない様に濃度調整にはかなり集中力が必要となり、相手もそんな隙だらけの敵を無視する筈もなく攻撃をしてくる。

とはいっても、ミナカであれば一分も掛からずに調整が終わるし、仮に攻撃がミナカに向かったとしても、彼女を囲うように展開される風の防護壁でそれは全て遮断されることになる。この障壁は並大抵の能力者では突破する事など不可能に等しい。

余談だが最初にセヴィラと対峙した時も彼女はまず最初にこの手段を使ったが、能力の性質上に置いてセヴィラキャンセラの無能力化は相手が悪かった為にミナ力は随分と苦戦を強いられてしまったのだ。

敵の攻撃は調整中のミナ力だけではなく、その後ろで戦闘に参加していない恋斗と睦月にも攻撃は飛んできたが、下がっていたセヴィラがそれらを全て一つ残らず斬り消したので二人に被害はなかった。

「何度も見てきた光景ですが、流石は天下のランクAと言ったところですね」

戦闘が終わり、地面に踞っている黒づくめを見渡した恋斗の最初の感想がそれだった。

彼の表情は驚いているのか、それとも呆れているのか、判断し辛い雑じり気のある笑みだった。

「浄化されし魂を持つ者」……改めて能力者と呼ばれる者の力を思い知りますね」

「……えっ？」

流れるような自然の口調で言った恋斗の言葉。

だが、側でそれを聞いた睦月には、どうにもその言い回しに違和感があるように感じた。

「あつ、いえ、ただの独り言です。気になさらないで下さい睦月さん」

不思議そうな視線を送る睦月に気付いた恋斗は直ぐ様いつもの笑

みを浮かべてそう答えた。

「……………」

そんな二人のやり取りを近くで聞いていたセヴィラはその鋭い表情をより一層深くしてヘラヘラと笑っている灰髪の少年の方を見ていた。まるで何かを探るかのようにな、

「ふう、……雑魚相手に手加減するのも肩が凝るわね」

じつと恋斗を睨んでいたセヴィラが何か思い切ったように口を開こうとした時だった。

さっきまで戦場の前線に居たミナカが肩を回して愚痴を漏らしながら恋斗達の元へ帰ってきた。疲れた様子で眠そうな顔をしているのは無理もないだろう。

いくらランクAとはいえども今日一日だけで、能力を派手に使った正面突破と敵を引き付ける為の陽動、そしてセヴィラとの戦闘の直ぐ後に起きた先程の戦闘と、立て続けに能力を使えば疲労も蓄積する。神の奇跡を起こせたとしても、それを仕様するのはあくまで”人間”——いや、それ以前に彼女はまだまだたった十三の少女なのだから。

「お疲れさまです、ミナカさん」

そう言葉を掛けつつ恋斗は疲れた様子で戻ってきたミナカの元へいち早く向かい、有無を言わさないかのように彼女の体を抱き上げた。もちろん抱き上げ方はお姫さま抱っこで。

「ちょ、ちよつと恋斗！？ これくらい自分で歩け——」

「すみません、ミナカさん」

いきなりの、それも人目も気にしない恋斗の行動に困惑しながらも止めるように彼を怒鳴ろうとしたミナカだったが恋斗が途中で彼女の言葉を遮った。

「ど、どうしたのよ急に……」

「ミナカさんにこんなにも負担を掛けさせたのはイレギュラー要素を考えずに容易に作戦を提案した俺の責任です。もっと俺がしっかりしていれば……」

彼の表情からは完全に、とまでは言えないが笑みが消えて、声のトーンも普段より低いものだった。

「……恋斗」

いつもと違う恋斗を見てミナカは無意識に彼の名を呟いた。今までミナカは笑みのない恋斗の表情を余り見たことがなかった彼女にとって、こんな時にどのような言葉を掛ければいいのか分からなかった。

「今日はもう休んでも構いません。後の処理と報告、それと彼をあの時庇った理由も含めてあなたが休んでから説明します」

だから、と最後に言葉を付き足して恋斗は微笑みを浮かべた。赤子を安心させるような、今にも崩れてしまいそうな、優くて哀しそうな微笑みを、

「今はゆっくりと眠って下さい」

その言葉と笑みに安堵したのか、それとも疲労がピークに達したのか、恋斗がそう言った直ぐ後にミナ力は糸が切れたかのように瞼を閉じて眠ってしまった。

恋斗はミナ力が眠ったのを確認すると、そのまま近くのコンテナの影まで彼女を運び、身に付けていたポーチを外して中身を出してそれを枕代わりに使いミナ力を寝かせた。

「睦月さん、ミナカさんを少し見ててくれませんか？　どうやら彼が俺と二人っきりで話したそうな顔をしているので」

ずっと警戒の籠った視線を送っているセヴィラに社交的な笑みを向けつつ、恋斗は睦月にそう頼んだ。

「えっ！　あ、はい。分かりました」

それを聞いてセヴィラと恋斗の顔を見比べた後に睦月はミナ力が眠っているコンテナの方へ向かって行った。

「さて、これでお互い話しやすくなりましたね」

「……少し警戒心が足りないようだな小僧。俺達は敵同士だ。今すぐお前やあの無防備の風娘を殺すかもしれないぞ？」

剣を構えつつ殺気を言葉に纏わせるセヴィラに対して恋斗はなんのリアクションもせず、同じ態度のまま悠々とそれに答えた。

「ははっ、確かに。あなたがファミリーを騙してでも、睦月さん達を保護している優しい人だと知っても一応、敵同士には変わりませ

んしね」

皮肉のようにも聞こえる恋斗の答えに舌打ちをしながらセヴィラは構えていた剣を降ろした。警戒や殺気は未だにそのままだが。

「……あの娘から聞いたのか？」

「ええ、大体の話は聞かせてもらいました」

恋斗はセヴィラの視線をしっかりと受け止めながら言葉を続ける。

「話を要約すると、あなたは奴隷売買の為だと口実にし、実際は能力者至上主義の国家によって住む場所を失った人や迫害された人を賊や”本当の”人売り達から彼等を保護し、住む空間と生きる為の食料を与えていた、と……」

そこで一旦、話を切り恋斗はセヴィラの表情を伺うようにして、こう尋ねた。

「しかし分かりませんね……」

能力者、それ以前にマフィアのボスである貴方が仲間から反感を買うような真似をしてまで無能力者達を助けるのは何故です？ 事実、ファミリーは貴方を消そうと先程の裏切りまで企てた……」

「ハハッ、仲間だって？ あんな私利私欲にしか興味がない屑と一緒にするんじゃないやねエ！！」

どんなに深い悲しみや強い憎しみを持ったとしてもそれらが行き着く場所は同じ——それは超越した純粋な怒り。

彼の口から発せられた言葉に籠められた感情は正しくそれそのもの

だった。

「能力者のお前達には分かる筈もねエよなア……
小僧、この世界で弱者がどんなに理不尽な目にあって生きているか
知ってるか……？」

その問いに恋斗は答えられなかった。

確かに恋斗はこの世界で無能力者がどんな扱いを受けているかは”
知識として”知っている。

だが、この問いは”知識として”ではなく、”経験として”知っているかを問われている。知識しか知らない恋斗には、この男が求めるような答えを返すことが出来なかった。

恋斗が何かを答える前にセヴィラは語り始めた。

「俺も最初は弱者だった。とても優雅とは言えなかったが、今よりは
ずっと楽しかったさ……あの時までではな」

その後、セヴィラは自分に起きた理不尽な過去を、その怒りを感じ
情のままに話した。国を潰され、家族を踏みにじられた男の憎しみ、
悲しみ、そして怒り。

「……………一つ、いいですか？」

セヴィラの話しを聞き終えた恋斗が口を開いた。

セヴィラが語った中でずっと胸の中で疑問にあった言葉があったの
だ。

「あなたは最初に弱者だった言った。

となると、あなたのその力は第三者に与えられた、という事ですか

？」

普通に考えればそれを疑問に思うのは当たり前だろう。無能力者がある日突然、能力者に目覚めたなんてことはありえない。セヴィラ自身ですら、この事に関しては今でも疑問に感じていることだ。

この少年も未だ前例のない話に疑いを持っているのだろう、そう思っていたセヴィラだったが恋斗の質問には続きがあった。

「彼女に……、委託キフトに会ったのですか？」

能力者と私利私欲（前書き）

あらすじの方を変更しました。

能力者と私利私欲

ギフト——能力の名称にしては聞いたことがない、人物の名前なのだろうか……？ 情報が少ないこの時点ではセヴィラはこの少年の口から出たその言葉が何を意味するのか分からなかった。

だが、少年の様子を見る限りその単語は彼にとって余程重要なものだと判断することができた。

「セヴィラさん、能力が発症する以前に金髪の……浴衣を着た娘に会いませんでしたか？」

セヴィラにそう聞き直しながら大きく一步前に責め寄る恋斗の表情は先程と比べると一目で分かるほど異変があった。

中性的で整った顔からはいつも浮かべる笑みが消えて、黒掛かったブラウンの瞳は何か強い感情を灯していた。

「浴衣を着た娘——まさかあの時の夢が……？」

金髪という言葉には何も思い浮かばなかったが、”浴衣を着た娘”というワードがセヴィラの思考を強く刺激し、ふと浮かび上がったのが五年前のあの日。

ボロボロの体で朦朧とした意識の中で会話とも呼べない会話を交わしたあの少女。

顔は覚えていないが、漂わせる雰囲気は余りも異質で、その存在感が非現実的で、それでいて今でも記憶に強く残っているあの出来事をセヴィラは死を目前にした夢幻だと思っていた。

「！ 成る程、やはり彼女があなたに……」

セヴィラの言葉に、恋斗は何かに納得したようでそう呟き、複雑そうな笑みをして反応した。何かを懐かしむような、そして自嘲するような複雑な笑みを。

「……小僧、そのギフトって娘が俺に力を与えたのか？」

会話を読む限り、この少年の言うギフトという人物と自分が出会ったあの少女が十中八九、同一人物だと考えていいだろう。

そして推測の域を出ない考えたが、能力の発症と少女との出会いには何か関係がある。そう結論付けたセヴィラは恋斗にそう問い掛けた。

「ええ、そうです。この世界で他者に能力を発症させることが出来るのはランクSである彼女くらいですから……」

「……なッ！？」

先程と同じ複雑な笑みのまま首を縦に振り肯定を示してそう答えた恋斗の言葉にセヴィラは驚きを隠せなかった。

ランクS、この世界で十人と居ないスキルランクの最高地位の称号と同時に、帝都ではその正確な人数と能力が国家機密レベルに指定されるなど、未だ謎の多い能力者たちだ。

ランクSという言葉自体は有名なものの世間では顔を殆んど表に出さず最早、伝説的な存在である。

噂では、彼らは既存するどの種類の能力にも当てはめる事が出来ない固有能力を扱い、その力はどれもが神に等しきものだという。

だが、セヴィラが驚いたのは少女がランクSだ、という事ではな

かった。

（何故、こんなガキがランクSの能力を知っている……？）

能力を他者に与える能力。謂わば、己の意思で能力者を生み出す事の出来るその力は確かに驚いた。ランクSだと言っても過言ではない。が、問題はそこじゃない。

何故、自らをランクEと名乗ったこの少年ごときが国家機密クラスに値するランクSの能力について知っているのか、問題はそこにあったのだ。更に、この言葉の様子だと少年はあの少女と知り合いなのだと読み取れる。

最強のランクSと最弱のランクEが知り合い？ そんな事が現実的に考えてあり得る事なのだろうか？

セヴィラの思考の中で恋斗に対する警戒の鐘の音がどんどん大きくなっていく。

「……小僧、俺もお前に聞きたいことがある」

「……何ですか？」

セヴィラの言葉を察する限り、ギフトについての話題が終えたと判断した恋斗は表情をいつもの笑みに戻して返事をした。

「お前、何モンだ？ 何故、一介のランクEごときが国家機密のランクSの能力を知っている？」

「ははっ、何故って、そりゃいくらランクEでも知り合いの能力くらいは普通知ってますよ」

（ハッ、この野郎……あくまで誤魔化すつもりかよ）

恋斗の返した言葉に心の中で舌打ちをしながらセヴィラは両刃剣を握る右手の力を強めた。

（だったら、あの言葉で小僧の反応を見ればいい）

セヴィラは眼光と表情を陰しくし、威嚇するように言葉を続けた。

「浄化されし魂を持つ者」……何故そのランクEが『教団』が用いるスラングを知っている？」

「……………」

『教団』——その言葉で恋斗から返ってきた反応は先程のような笑みを浮かべた誤魔化しの言葉ではなく、ただ口を開かないだけの沈黙だった。

（沈黙は肯定、か……）

ハッ、『教団』だと？ ふざけやがって。確かにそれならこの小僧がランクSの能力を知っているもおかしくねエな……）

沈黙という回答。確かにその答えは今までバラバラだったワードの点と点とを結ぶ線になった。

だが、それらが一つになり出来上がった真実はセヴィラにとって最悪な内容だというのが彼の表情を見て取れる。

セヴィラは嘘でも肯定よりも否定の答えが欲しかった。何時、何が起こっても直ぐに対応出来るように恋斗の姿をしっかりと瞳に映し

ながら、額に汗が滲み、自然と剣を握る手が先程より一層強まっている。

そんな彼の心中を知ってか知らずか、先に動いたのは恋斗だった。

「……ふう、セヴィラさん。この話はこれくらいにしましょう」

動いた両手の手のひらを天に向け、恋斗が疲れたようなため息を吐いた。

余りにも気の抜けた態度に呆気にとられているセヴィラをお構い無しに恋斗はお気楽口調のニコニコスマイルで言葉を続けた。

「いやゝそろそろ俺も任務を終わらせて帰りたいし、ミナカさんの方もあんな硬い地面じゃなくて、早くふかふかのベッドに寝かせてやりたいですしねゝ」

さっきまで自分がこの少年にあそこまで警戒をしていたのが馬鹿らしく思えてしまう恋斗の言葉だが、ここで話しを変えようとするのは、『これ以上話すことは何もない』という意味が籠められているようにも思える。

「ハッ、そうだな。お喋りはこれで終わりだ。

ならどうする？ ああ風娘の代わりに今度はお前が俺を捕まえるか？」

下手に追求するより、向こうがこれ以上の会話を望まないならこちらもそうするだけ。それに最初から自分たちは敵同士、暢気に会話をする時点で間違っているのだ。

セヴィラは任務を終わらず、と言った恋斗に反応し剣を構えようとしたが、恋斗はそれに首を横に振って制止した。

「俺達が今回受けた任務は捕らわれている無能力者奴隷の解放と、その首謀者であるセヴィラさんの捕獲でしたが、奴隷が居ない時点でこの任務は白紙ですよ」

まあでも、と恋斗は言葉を付け加え続けた。

「任務は無効となりましたが、やるべき事は残っていますけどね。先程の戦闘の一件であなたは完全にダムクライツのボスではなくな

った。
そうなれば、あなたが保護した人達も本当に奴隷売買の商品にされかねません。ですから、まずは彼らをここから逃がす必要がありますね」

さも、当然かのように言葉を並べていく恋斗にセヴィラは呆氣にとられた。

恋斗が言う内容は彼の知る能力者という人種が言うようなものではなかったからだ。

「まあ、彼らを逃がした後は無能力者主義の国にでも保護を要請すれば今度の彼らの生活は保証され――」

「ちよつと待て、小僧」

恋斗の余りにも能力者らしからぬ言動にセヴィラは思わず声を掛けた。

「あの風娘といい、俺はお前たちが理解でねエ……
任務は無効になった、なら何故そこまでする必要がある？ 助けた

「ところでお前たちには何の利益もない筈だ」

能力者の身でありながら何の見返りも求めず無能力者を救おうとする者が果たして世界でどれ程いるのだろうか？

能力者は自分の私利私欲の為にしか動かない。

セヴィラは今まで見てきた能力者は全てがそれに当てはまっていた。

だが、こんな変わった能力者はセヴィラは知らないし、見たこともない。

だからこそ、彼は己の知らない能力者のことに興味が湧いた。

恋斗はそんなセヴィラの問いに、笑みを浮かべつつ彼に視線を合わせながら口を開いた。

「彼らを助けるのは、別に任務の報酬の為でも、彼らの感謝の声を聞くためでもありますよ」

富みの為でも、名声の為でもない。

「彼らが不幸になるのが気に入らなかったから、ですよ」

”気に入らないから”——あくまでもこの能力者は私利私欲の為だった。

救出と勧誘

「子供や女、老人達は先に行け！ 男はその後だ！」

敷地の東側に位置する恋斗が睦月と出会ったあの二階建ての大きな倉庫。

その一階内部の中心でセヴィラの張りのある声が響いた。

「皆さん、こちらです！」

俺の後を二列になって付いてきて下さい！」

次に倉庫で響いた声はソプラノボイスの恋斗の声だった。

彼はシャッターの上がった倉庫の入口付近で手招きをしながら、次々と流れ来る人々に指示をしていた。

この倉庫の一階は廊下を挟んで向き合うように檻が並び、まるで牢獄のような構造をしていて大体一つの部屋に二、三人が収用されていた。

全ての檻の人数を会わせるとその総数は約八十人ほどだろうか。

今はセヴィラの指示通り檻に入っていた人々の内、まずは女子供と老人が檻から出て廊下にやや混雑した状態で群がり、檻には男達だけが残っていた。

（あの小僧はまだ信用した訳じゃねエが、今は仕方がねエ）

声を響かせて指示をしつつ、セヴィラは入口付近の恋斗を睨み付

けながら胸の中で悪態をついた。

セヴィラがこうして恋斗と共に無能力者達を動かしている理由はあの会話の後にあった。

恋斗の言葉を聞いたセヴィラだが、彼の事を信用などしてはいなかった。だが、彼の言った言葉には一理あった。

確かに、ダムクライツファミリーのボスという地位を失ったセヴィラでは保護した無能力者達をこれ以上此処で匿うことは出来ない。セヴィラを襲ったファミリーの連中も今は地に伏せているが死んでいる訳ではない、時間が立てば目覚めてしまう。

今までは手下に色々と口実を言って誤魔化してきたが裏切りが起った以上、セヴィラ無きファミリーは当然、無能力者達を商品として売られる……いや、下衆の考える事だ。彼女達を己の欲望の捌け口に使うかも知れない。

そんな事になるくらいなら、あの胡散臭いランケEの言葉を信じて奴の提案を呑んだ方が遥かにマシ。それに、負傷した今の自分一人では限界がある。

そう結論付けたセヴィラは恋斗の提案に応じ、こうして彼と一時的だが協同する事にしたのだ。

「ははっ、これは嬉しい誤算ですね……」

余りにも素直に従ってくれる無能力者の人々を見ていた恋斗は思

わずそんな言葉を漏らしていた。

こうやって列を作って移動している今もそうだが、最初にセヴィラが寝ていた彼らを起こして事情を説明した時もざわめき一つなく最後まで聞いてくれた。

能力者であるにも関わらず、彼らはセヴィラに厚い信頼を抱いていた。

そのお陰で、多少は彼らから反発や反感があると思い時間が掛かると践んでいた恋斗の予想は杞憂に終わった。

因みに、恋斗がセヴィラに提案した考えというのはこうだった。

まず当初、任務で奴隷を解放した後に彼らを此処から運ぶつもりで恋斗がスタンバイさせていた馬車に彼らに乗せる。

彼らの数が八十と、恋斗が予想していた以上の人数だったので馬車が足りないと思われたが、その八十の内に体の小さな子供や女性達が半分以上を占めていたお陰でなんとか馬車の数は足りそうである。

そして彼らに乗せた馬車の目的地だが、それも恋斗が事前に用意しており、帝都から少し離れたスラクルという自然の豊かな小さな国だ。

スラクルは帝都やその近郊と違って無能力者に対する差別がなく、能力者と無能力者が共に協力して共存する世間では珍しい国だ。

こういった能力の有無を関係なく人々が共存する地域はスラクル以外にも希に見受けられるが、それら全ては決まって能力者至上主義の帝都から離れている。

世間がこんなにも能力の有無で二極化している最大の原因としてはやはり、世界一の領土と文明を誇る帝都がその様な主義を掲げている所為だろう。

そして、馬車を用意したのもそうだが恋斗がここまで用意周到に揃えていたのにはその帝都が主な理由にあたる。

帝都は今回の任務で無能力者達の救出とあつたが、救出した後は彼らに対して全くと言っていい程、その後の生活支援などは行われない。能力者達の集まりである帝都が無能力者達の為に国の金を使う筈がないのだ。

これも普通の国なら暴挙が起きてもいい事柄だが、生憎と帝都はそんな普通の考えを持ち合わせていない。

そういつた理由から恋斗は事前に完璧な準備を整えた上で今回の任務を受けたのだ。

「さて、これで女子供や老人達は最後ですね」

倉庫からぞろぞろと流れてくる列を馬車の所まで先導していた恋斗は後ろを向いて今、倉庫から出てきた列の最後尾にいる七、八歳くらいの女の子を見て取り敢えず一息吐いた。

「おや……？」

やはり五十を越える列を一人で先導するのは少し疲れるな、と恋斗が思っていた時だった。

先程、倉庫から出てきた列の最後尾に居た女の子が突如、踵を返して倉庫の入口に居るセヴィラの方へ駆けて行った。

「ふふつ、随分と好かれているじゃないですか、セヴィラさん」

ここからでは何を話しているのか聞こえないが、明るい笑顔を振り撒く女の子の様子を見る限り、恐らく女の子はお礼のような感謝の言葉を彼に言っているであろう。

セヴィラも常に相手を威嚇するようなあの強面を今は出来るだけ緩め、視線を合わせる為に膝を地面に付いて女の子の頭を撫でていた。

「ホッホッ、あやつはワシらからすれば命の恩人じゃからの
皆からよお好かれとるわ」

恋斗がセヴィラと女の子の方を微笑みながら眺めていると、列の先頭に居た背中が曲がった小柄で、年季の入った皺のある顔の翁がそう言って笑っていた。

「なんせ、この大陸で居場所が殆んどないワシらのような人間を、あの若者は救って下さった。

そのお陰でワシら今日まで生き延びることが出来んじゃ」

感慨深い表情をしながら翁は話を続けた。

「しかも、あやつはワシらをここに連れてきた時、『牢へ閉じ込めるような真似をしてすまない』と言って皆の前で頭を下げたのじゃよ。

寝る場所や食べる物を与えてくれるだけで十分ワシらは感謝しておるというのに……」

その翁の話を聞き、恋斗は改めて列を構成する無能力者の人々を見回した。

彼らが身に付けている服装こそは、睦月が着ていたような薄い布切れ一枚で作られた奴隷に着せるようなものだったが、よくよく見れば彼らの中で誰一人として暴力を受けたような後や、健康に異常が見られる人が居なかった。

それはセヴィラが彼らの事をしっかりと考え、管理していた事が読み取れる。

睦月が襲われそうになったのも、侵入者が暴れ回っていた非常事態であったからであり、恐らく普段の状態ならば彼女が襲われる事などセヴィラが許さなかったであろう。

「しかし、あやつもそうじゃが、お前さん達のような能力者がもつといれば、世界も変わるかもしれんの……」

翁がホッホッ、と笑いながら言ったその言葉に恋斗はニコニコだった表情を少しだけ強張らした。

能力の有無など関係なしに人と人とが手を取り合えるような世界。確かにそれは理想的とも言える素晴らしい光景だが、所詮は理想——いや、空想とも呼べる幻だ。現実にはセヴィラやミナ力のような考えを持つ能力者の方が異端で、大半の能力者が皆、帝都の掲げる主義と同じような考えだ。

強者が正義で弱者が悪

虚しいことだがそれがこの世界の理だ。

この翁はそれを分かっているながら、そんな夢幻の願望を口にしていた。

恋斗はそんな翁の言葉を馬鹿にすることも、否定することもなく、ただ頷いて素直に受け止めた。

「ええ、全くそうですよね……」

恋斗は視線を翁から外して空を見上げ、『けど』と言葉を繋げた。

「セヴィラさんやミナカさんならともかく、俺みたいな奴が沢山いたら大変ですよ?」

「なぜじゃ?」

翁は笑いを止めて、恋斗の言葉に疑問を感じて彼の顔を見上げた。

「だって俺は……彼らのような優しい人間なんかじゃありませんから」

そこにあつたのはニコニコを浮かべる少年の笑顔ではなく、夜空に浮かぶ月を遠い目で見つめた感情のない笑みだった。

「これで全員、か……」

無能力者達を全て馬車に乗せ、先程行つた最後の馬車の後ろ姿を眺めながらセヴィラはそう呟いた。

「……ハッ、変に情が移っちゃったな」

セヴィラはあの時、礼を言ってきた少女から貰った紙をポケットから取り出した。

「ありがとう、か……」

そこに書かれていた文字と、自分と思われる絵を眺めるセヴィラは自分の頬が緩まっている事をどうやら自覚していないようだ。

また、感謝の言葉を聞ける日が来るとはな……

全てを失い復讐と憎悪に身を染めた自分が、誰かに感謝されるなんてあり得ない筈だった。

そもそもセヴィラがダムクライツに入ったのは、無能力者の保護の為ではなく、祖国を壊滅に追い込んだ一人の能力者と、隣国への復讐の為だった。

そしてファミリーに入って間もなく、仇の一つである隣国の重鎮を消した際、その重鎮が奴隷として雇っていた無能力者の姿が、全てを奪われた弱者であった過去の自分と重なって見えたのがきっかけだった。

その日以来からだだった。無能力者を保護する様になったのは

自分の働きが評価され、組織のボスにまでなり詰めたセヴィラは奴隷売買と称して無能力者達を自分の傘下に配置し、そして奴隷を売るという口実で保護した彼らを差別のない安全な国へ送った。

最初は重なる過去の自分を救おうとした、ただの自己満足だったけど、それがいつの間にか自己満足ではなくなっていた。

徐々にこの事が手下に不審に思われていると知りつつ、セヴィラはそれを止めようとしなかった。

そして遂には手下に裏切られた。

組織の力を失った今では、もう片方の仇である、あの能力者の手掛かりもないに等しい状況になってしまった。

だけど、少女から貰った絵を見ていると何故か心の中で後悔は生まれなかった。

「さて、取り敢えずこれで一段落着きましたね」

声が聞こえた方向を振り向くとふう、と息を吐いて腕を頭上で伸ばしている恋斗の姿があった。

「ああ……」

セヴィラは振り向く際にポケットに少女から貰った紙を入れ、一言それだけ答えた。

「まあ、それはいいとしてセヴィラさん、あなたはこれからどうするつもりですか……？」

どうやらこの言葉を聞く限り、恋斗は本当にセヴィラを捕らえる気がないようだ。

セヴィラは恋斗に対する警戒を少しだけ解いてその質問に答えようとした。

だが、言葉が詰まった。まだ何も決めていなかったのだ。

そんなセヴィラを察したのか恋斗は笑みを浮かべてこう言ってきた。

「ふふっ、まだ決まってる様なら俺から一つ提案がありますが、どうですか？」

「……提案？」

恋斗のその言葉に怪訝な表情を浮かべてセヴィラは目の前のニコニコを睨み付けた。

すると、次にニコニコはセヴィラにこう言った。

「俺達と同じ、ランカーになりませんか？」

夢幻とまくら

それは純白の世界で見た忘れ去られし幻想の日々――

温かくて、優しくて、眩しくて、そして何故か最後に決まって私の中で虚しさが残るそれは、今もこうして夢となり、虚構の姿として甦る

――ねえ、聞いて！聞いて！ 今日ね、
□ □ トが初めて私のこと、ちゃんと名前で呼んでくれたの！

何もない純白の世界で最初に移し出されたのは十一か二くらいの、フード付きのローブで顔を隠した小さな女の子だった。
この幻で彼女はいつも欠かさず登場する。
もしかしたら、彼女がこの物語の主人公なのかもしれない……

だけど、それはあくまでも私が勝手に思い付いた推測で、いつも第三者の視点からしか彼女の姿を見ることの出来ない私には、真実を知る術を持ち合わせていない。

――そう、それは良かったわね、
□ ナ □

次に登場したその人物も少女だった。最初の少女より年上で、大體十五前後。身に付けている服装は確か、東の国の民族衣装か何かだと思う。

その少女の顔には不自然に靄が掛かっている、どんな顔をしているのか、こちらからでは伺えない。

その人物はしゃがみ込んで駆け寄ってきたフードの少女の頭を優しく撫でて少女に言葉を返した。

——「うん！　だつて、□□トつてば、私のことをいつも『妹さん』って呼ぶのよ？　だから今日は『名前で呼んでよ』って泣いてるフリしたの！　そしたら、□□トつたら、焦りながら私のこと、□□カって呼んでくれたわ！」

フードの少女は頭を撫でられているのが気持ちいい様で、少女の声には高揚した感情が乗せられていた。

——「ふふっ、□ナ□つたら、彼を困らせちゃダメでしょ？」

フードの少女に優しい声色で返した彼女は、少女の頭を撫でる手を止め、フードの中にある少女の頬に優しく触れた。

この人物が今言った言葉もそうだったが、こんな風に会話中の特定の単語がノイズ混じりになって聴こえなくなっている。多分、誰かの人物名だと思う。

——「えゝだつて、私も名前で呼んでもらえたかったもん！」

フードの少女は少し拗ねたように彼女に言った。
そんな少女を温かい言葉で宥める彼女。

彼女達二人が私にはまるで仲の良い母と子のように思えた。

——全く、この娘ったら……本当、□ナ□は彼のことが好きなのね

——えっ！？　そ、それは……

その言葉にたじろぎを隠せない様子の少女を見た彼女がさらにか
らかうように言葉を繋いだ。

——ふふっ、隠そうとしてもダメよ？　だって顔にそう書いてい
るもの

その彼女の言葉に少女は慌てて自分の顔を両手で隠そうとしたが、
そうする前に彼女が少女を抱き締めた。

——私はミ□□のことなら何でも分かるわ

その時、彼女の顔に掛かっていた靄が一瞬だけ晴れたように見え
た。

——だって、私はあなたの——

それは、ただ温かくて、とても優しくて、不思議なくらい眩しくて、涙が出そうなくらい儂くて……そして何故か懐かしいと感じた笑顔があつた。

鼻孔をくすぐる妙な香りが気になった。何故かそれは心地よく、安心させるような感じがした。

「うつ……んっ……」

その正体が無性に気になり初め、手探りでその輪郭をなぞり、それをぎゅっ、と抱き締めて深く沈んでいた意識を起こそうとした。

「……んっ……、まく、ら……?」

少しだけ開けた重い瞼から入ってきたのは青いカバーの羽毛の枕。ミナカ・イルピリスはその枕を胸元で抱いた状態で目を覚ました。

「…………あれ？　ここは…………」

枕を抱き締めたまま取り敢えず上半身だけを起こし、やや眠気が残る頭を覚醒させながらミナカは辺りを見回した。

（おかしいな、いつ着替っけ？…………それになんでこんな所で…………）

部屋を見回すと清潔的な印象をもたらす白で覆われた光景が目映った。

さらに、自分の身の回りも確認してみると、彼女が着ていたのは彼女が寝るときによく好んで身に付ける淡いピンク色をした可愛らしいネグリジェだった。

ミナカの下にあるシングルベッドの側にはこ洒落た装飾が施された木製の四角い机と二つの椅子が配置されてあった。

よく見ると、二つある椅子の片方に彼女が着ていた筈の白を基準に赤の柄が入った上の衣服と黒のミニスカートが綺麗に畳まれて置いてある。

「うーん…………」

色々疑問に思う点があるものの、寝惚けた彼女の思考ではこの状況に対して納得出来るような答えを導くことは出来なかった。

トントン、

そんなミナカが頭を悩ませている時だった。

ベッドに居る彼女から見て右にあるこの部屋の木でできたドアからノックの音が聞こえた。

ミナカは思考を中断し、そのドアの方へと視線を移した。すると、ノックから一息くらい置いた後でドアが開かれ、そこから入ってきたのは白のエプロンドレスを見に纏った見覚えのある少女だった。

「あつ、目が覚めましたか……？」

エプロンドレス、俗に言うメイド服の少女はミナカの様子を伺うように視線をこちらに向けた。彼女の手にはトレーがあり、その上には器に盛られたパンやスープ、サラダなどの食事があった。

「アンタは確か……」

ポニーテールで纏められた長い黒髪を腰の後ろで揺らしながら、少女はベッドの近くにあった服の置いていないもう一つの椅子に腰掛け、彼女は食事の乗ったトレーを机の上に置いてミナカに対してにつこりと笑みを向けた。

「えつと、ちゃんとした自己紹介はまだでしたね、私、睦月と申します。よろしく願いますね、ミナカちゃん」

「え？ ええ……よろしく」

ぺこりと礼儀よく頭を下げる睦月に少し戸惑いながらもミナカはそう返事を返した。

「どつやらお目覚めのようですね」

「あつ、恋斗さん」

少女二人がソプラノ声が聞こえた方を向くと開いていた扉から恋斗がいつもの表情で顔を覗かせていた。

部屋に入ってきた恋斗に睦月は座ったまま軽く一礼をし、恋斗もやや照れたような笑みでそれを返した。

「ふんっ、なにデレデレしてんのよ」

「いてっ！」

そんな恋斗の反応に機嫌を損ねたミナ力は軽く指を振るった。すると恋斗の足下で風が吹き、足を掬われた恋斗は勢いよく地面へ体を伏した。

「いてて……ひどいですよミナ力さん、俺が何をしたって——」
「うるさい！」

涙目で額をさする恋斗に有無を言わず追撃を加えるミナ力。睦月はそんな二人の光景を穏やかな笑みを浮かべて見守っている。

「ふふっ——あれ？　そういえばミナ力ちゃん。その枕、さっきからずっと抱いてるみたいですけど、そんなに気に入りました？」

「……？　ああ、この枕は……って、あれ？」

クスクスと笑っていた睦月がミナ力の胸元で抱かれたそれを指差した。

ミナ力は睦月に言われて無意識に抱き締めていた枕の存在を思いだし、それに視線を落とした。

改めて枕を見ると、何故かこの部屋を見た時と同じく、脳裏のどこかでこれについての記憶が埋もれているように感じた。

（青色の羽毛の枕、それに白を基準とした家具の少ない部屋……えっ？）

眠気も徐々に覚め、靄が掛かっていたような思考から浮かび上がってくる枕と部屋の正体。

そして何故だか真実が迫るに連れ、ミナカの顔も紅潮していく。

「えっ、ちょっと待って。この部屋ってまさか……」

そう、ミナカには絶対に見覚えがある筈なのだ。

自分と一年半前からずっと共に行動を一緒にしている、いつも笑みを浮かべるあの灰髪の少年が主であるこの部屋と、その彼が毎日使っている枕なのだから――

「な、な、なんで私が恋斗の部屋に居るのよおおおおお……！！」

顔を林檎のように紅くした少女の叫びが木霊した。

任務報告とピエロの嘲笑

セレナ地区の路地の一角にひっそり佇むとある一つの喫茶店がある。

外見は周りの民家に合わせた赤い煉瓦作りの二階建ての建物で、内面の方はカウンター席と数カ所のテーブル席のあるオーソドックスな造りだ。

そしてこの喫茶店の二階のある一つの小部屋。

某事情により半暴走状態にあった一人の少女とそれを宥める為に文字通り体を張った少年、そしてぐちゃぐちゃになった部屋を片付けるエプロンドレスを身に纏った少女が居た。

ミナカの叫びが部屋に響いてから約十五分。

顔を真っ赤にした興奮状態のミナカを相手に恋斗と睦月の二人がかりでなんとか気を落ち着かせ、念のため少し間を開けようやく話しが出来るまでに冷静になった彼女に恋斗は今回の任務の報告をした。

「ふん、じゃあ結局、あの男は悪い奴じゃなかったってわけ？」

先程まで興奮状態にであったミナカはぐちゃぐちゃになった金色の髪に櫛を通しながら報告を一通り終えた恋斗にそう尋ねた。

ちなみにぐちゃぐちゃなのは彼女の髪だけではなく、ベッドや机などこの部屋全体に被害出ている。

「いえ、まあ、”悪い奴”という言葉で当てはめるなら一応、今ま

でのダムクライツが起こした罪状もあるので”悪い奴”になるのですが、彼が睦月さん達をちゃんと保護していたのは事実ですよ」

ぐちゃぐちゃにされた自分の部屋になんとも言えない虚しさを感じながらもミナカの問いに苦笑しながら答えた。

「そう」

恋斗から返ってきた言葉に一言そう答えてミナカは櫛を通す手を止め、報告された今回の任務を頭の中で纏め始めた。

今回の任務は奴隷売買を目的に捕われた無能力者の救出、及びその主犯組織であるダムクライツファミリーのボス、セヴィラ・ダムクライツの捕獲。

だが、その奴隷売買というのはセヴィラがファミリーを使って居場所のない流浪の無能力者を保護する際に使った口実で、実際には奴隷売買など行われていなかった。

恋斗の報告の中でセヴィラがなぜ無能力者たちを庇ったのか、詳しい理由は聞かされなかったが、過去になにやら事情があるらしいが、私がそれを知る必要はない。

そしてセヴィラが保護していた無能力者達だが、彼らはスラクルという国が受け入れてくれたようだ。確かに、あの国はこの大陸の中で無能力者が暮らすには安全な部類に入る。これで彼らの事については一安心だろう。

あとは、敷地に居たダムクライツファミリーについてだが、その殆んどが帝都の治安維持隊によって連行されたらしい。連行された

ファミリーは今までの罪状から、然るべき処分が下されるだろう。因みに、治安維持隊が来た頃にはセヴィラの姿はなかった。

それと睦月から聞いた話だと、彼女を襲おうとした男は現在も行方不明だそうだ。

「……ねえ、恋斗」

一通り頭の中で今回の件について纏め終えたミナ力だが、未だに残る疑問点があった。

「なんですか？」

「まだ聞いてなかったんだけど、なんでここに睦月がいるの？ しかもメイド服で」

恋斗がミナ力に任務の報告をしている時からずっと、ぐちゃぐちゃになった部屋を整理していた睦月にミナ力は手に持っていた櫛で彼女を指した。

「え？ 私ですか？」

「だってあなた達はみんな恋斗がスラクルって国に馬車で送ったんですよ？」

ミナ力の言葉に手を止めて目をぱちくりさせる睦月に恋斗はさすが口を開いた。

「ああ、実は俺が彼女に頼んだんですよ。ほら、最近マスターが店の人手が足りないって嘆いていたじゃないですか」

マスターというのはこの下の一階にある喫茶店の亭主の事だ。

この建物は元々そのマスターの所有しているものだが、恋斗はマスターと知り合いの馴染みとしてこの二階の空き部屋を使わせてもらっている。

因みにミナカの部屋はこの恋斗の部屋の直ぐ隣にある。

彼女曰く『男子立ち入り禁止』だそうで、今回の事も恋斗はそれを律儀に守って仕方なく自分の部屋で寝かせたのだが、彼はそれをミナカ言った瞬間、何故か空気の塊で腹を殴られた。

睦月が言うには『恋斗さんは乙女心に対する配慮が足りません』だそう。

「だから、睦月さんに俺の知人の喫茶店で働いてみませんか誘ったんですよ

あつ、因みにその服についてはマスターの趣味だそうです」

もしこれでこの服がマスターではなく、恋斗の趣味なら間違いなくミナカは彼に竜巻を放っていた事だろう。

「へえーそうなの。睦月の方もそれで良かったの？」

「はい、私、料理が得意だったので一度でいいからそういった仕事をしてみたかったんです」

自分よりも年上の睦月を早速、呼び捨てで話す辺りミナカらしいといえそうだが、睦月の方も呼び捨ての事は気にする様子もなくミナカに答えた。

更に睦月は言葉を繋いだ。

「それに、恋斗さんに助けてもらったお礼をしたかったの……」

「あはは……お礼だなんて、俺は何もしてませんよ」

頬をほんのり赤く染めながら恥ずかしそうに顔を俯かせる睦月に恋斗は困ったような笑みを浮かべ頬を掻いた。

「……………」

「……えっと、ミナカさん、なんでそんな食い入るような目付きで俺の方を睨むんですか……？」

睦月の先程の言葉を聞いてからミナカはものすごい形相で恋斗を睨み付けていた。もう、これでもかってくらいに

「アンタは黙ってなさい！」

ついさっきも同じやり取りをしたが、ミナカは今度は風ではなく、手元の枕を恋斗の顔に目掛けて思い切り投げた。

「イテッ！ ひ、ひどい……」

俺が何をしたんですか、と頭にぶつかり地面に落ちた枕を拾いながら恋斗はミナカの方を見たが、相変わらず不機嫌そうである。

理由は簡単だ。睦月のあの言葉と照れ隠しをするような仕種を見れば大抵の人間なら分かる。

まあ、尤もあのニコニコが彼女の気持ちに気が付いているかは分からないが、十中八九ないだろう。

「ま、まあ、とりあえず報告は以上です。じゃ、俺は下でちよつとマスターと話があるので睦月さん、ミナカさんの事を頼みますね」

不機嫌そうなミナカの相手をするのは凶と判断したのか、それとも本当に話があるのか分からないが、恋斗はそんな台詞を残して部屋を出て行った。

「全くアイツは………あつ!!」

「どうかしましか、ミナカちゃん？」

忙しい様子で部屋を出て行った恋斗に文句を垂れようとしが、その前にミナカはある重要な事を恋斗に聞くのを忘れていた。

（ダムクライツが一年半前の事について関わっていたかどうか恋斗に聞き忘れてた……）

そもそも、この任務を受けた根の部分での理由は一年半前に失った自らの記憶について手掛かりを探す為だ。

「まあいつか、後でアイツに聞けばいい事だから」

「……………」

頭に疑問を浮かべる睦月に『なんでもないわ』っただけ言っただけで話を切った。

階段を一段ずつ降りていくと、まず最初に見えたのはカウンター席の向こうで煙草を吹す筋肉質の体をした中年の男だった。その頭にはバンダナが巻かれており、服装は上下が黒のラフな格好だ。

「あら、ミナカちゃんの方はもういいの？」

「ええ、あの様子を見る限り大丈夫ですよ」

カウンターの隣にある階段から降りてきた恋斗を見て中年の男はそう尋ねた。

その口調は明らかに外見とは一致しないものだったが、恋斗はそれに馴れているのか全く気にした様子を見せずに言葉を返した。

「客がないようですけど、今日は休みですか？」

周りの席を見ても自分たち以外に誰もいないこの喫茶店に恋斗は疑問を抱いてそう聞くと、中年の男は直ぐに答えた。

「いんや、普通なら営業時間だけど、そうしたらミナカちゃんが落ち着いて寝れないじゃない。

あと、二人きりの時はその言葉使いをしなくていいわよ。四六時中そんなだとアンタも疲れるでしょ？」

質問の答えと供に返ってきた言葉を耳にしながら恋斗は男の座るカウンター席の隣の椅子に腰を降ろした。

「……助かるよ、けどもう慣れたさ」

そう言ったのはいつも笑みを浮かべるニコニコ少年ではなく、感情が希薄に見える表情に変わった恋斗・タリナスだった。

「それで、今回の『釣り』はどうだった？」

隣に恋斗が座ったのを確認した男は厨房に行ってワインの瓶とワイングラスを二つ持ってきてそれを恋斗の前に置いた。

「まあまあ、と言ったところかな。」

相変わらず本命は釣れてくれなかったけど、彼女に力を与えてもらった男と出会ったのは中々の収穫だよ。あと、可愛いメイドさんですね」

恋斗は自分の前に置かれたワインを開け、二つのグラスに均等に入れた。

「流石マスターだね、睦月さんのメイド服は完璧に似通っていたよ」

「そりゃそうよ、なんてったって素材がいいからね、あの娘。礼儀は正しいしオマケに料理の腕もいい。」

あんな娘が手伝ってくれるなら仕事も楽になるわ」

「フフツ、それはよかった」

希薄な表情を浮かべていた恋斗は少しだけ頬を緩めながら、ワインの注がれたグラスの一つをマスターと呼んだ男のカウンターの前に置いた。

「で、その力を与えてもらったっていう男の方はどうだったの？」

マスターはそれを掴んで軽く一口ワインを口に含んでグラスの縁を指でなぞりながら恋斗に聞いた。

「彼も中々面白い男だったよ、『教団』についての知識も少しあったようだしね」

「！ それって……」

「ああ、大丈夫だよ。その男は『教団』の人間じゃない」

驚いたような声を上げたマスターに恋斗は安心させるかのように苦笑を浮かべてそう言った。

「まあ、仮に『教団』の人間だったらそれはそれで好都合だけどね」

少しトーンを落とした声で放たれたその言葉には強い意思が籠められていた。

「……………いつまで、アンタはそのピエロを演じるつもりなの？」

マスターはそんな恋斗に哀しげな表情と瞳をしながらそう尋ねた。
返ってくる返事が変わる事などあるはずがないと知っていながら――
だが、それでも聞かずにはいられなかった。

「いつまで」と聞かれたなら「死ぬまで」と答えるよ」

この灰髪の少年が浮かべる虚しく、乾いた笑みが――

「誰を騙しても構わない、誰を傷付けても止まらない」

酷く痛々しい見えるから――

「一年半前に交わしたあの二人との約束と、その時にできた目的の
為なら――」

恋斗はふと視界に入ったグラスに注がれたワインに映る今の自分に
思わず嘲笑をしてしまった。

「僕はミナ力を『餌』に使うことさえ躊躇わないさ」

何故ならそこに映っていた人物があまりにも『恋斗・タリナス』らしくなかったから

ある学生視点から見た物語のプロローグ（前書き）

今回の話から新章突入です。また、今回の話はいつもと違ってキャラクター視点です。

ある学生視点から見た物語のプロローグ

不幸というものは様々な事象と確率が重なりあって初めて生じるものであつてそこには何らかしらの理屈や理由が必ずある。

何の理屈も理由もなく不幸を呼び寄せてしまう不幸体質なんて代物は所詮、三流ラブコメの主人公みたいなハーレム野郎にしか備わらないフィクションの中での設定だ。

だつてそうだろ？ 何も特別な行動を起こさない人間が何か特別な出来事に巻き込まれるなんて現実じゃそうそうない。

例えば、放課後に何となく街中のゲーセンを歩いていただけで目が合ったチンピラに因縁を付けられ、そのまま喧嘩に突入し、そいつらをボコボコに返り討ちした所をたまたま自分のクラスの担任に目撃され、理不尽なまでに一週間の停学を言い渡されたとしても、それはソイツが不幸を呼び寄せてしまったという訳ではなく、様々な事象の確率と理屈、そして理由が揃ったからこそ起きた現象であつて、決して俺に不幸体質などとフィクション設定があつたからではない。

そう、俺は不幸体質なんかじゃないんだ。

——なら、この状況はなんだ？

「……れ、恋斗が二人居る？」

啞然、いや驚愕といった方が正しいだろうか？

俺の目の前に居る二人の人物の内の一人、ゴスロリ系の服を着た金髪碧眼でショートヘアの可愛い女の子が口をパクパクさせながら自分の隣に立っている男と俺を見比べながらそう言った。　っていうか、外見明らかに外国人なのにえらく流暢な日本語だな。

あと、残念ながら俺の名は『レント』ではない。まあ少し惜しいな。

「ハハッ、これは驚きましたね……」

嘘つけ。驚きましたね、って言う割にはニヤケてるじゃねえか。少女の言葉に釣られるように隣に居たもう一人の俺が苦笑のような表情を浮かばせてそんな言葉を口にしていた。

ふむ、こちらは俺と同じ年くらいか。着てる服装は長袖の白いシヤツにジーンズのような黒のズボン、そして肩から黒いローブを羽織った姿だ。髪は白髪、いや白というよりも灰色だな。で、顔の方だが隣の少女と比べると日本人に近い。っていうかそれ以前に……

「……俺と、同じ顔？」

驚いたことにこの男、顔付きが俺と全くと言っていい程、酷似している。違つと点を挙げるとすれば、こちらの方が”ほんの少しばかり”目付きの悪いのと黒髪くらいだ。

しかし何故だろうか、俺は目の前に居る自分と同じ顔付きをしたこの男に対しても余り驚嘆のような感情が浮かばなかった。

やはり、自分に置かれたこの状況が特殊過ぎた所為だろう。些か俺の感性が麻痺して正常に働いていないようだ。

もしこの状況が俺の普段の日常の中で起きた出来事なら俺もあの女の子と同じ反応を示していただろうが、残念なことには今はイレギユラーな非日常という状況でのイベントだ。

まっ、そんな事より今はとりあえずこう言っておこうか。

「……ここ、何処？」

気が付けばいつの間にか辺りは日の光が届かないような暗い路地。そして何故か俺はゴミ捨て場のような場所に積もった廃棄物の山の^上。

……っで、目の前には先程説明した外国人少女と自分そっくりの灰髪の少年。

……いかな、突っ込む点が多すぎて焦る感情すら失せてしまう。

ここは一旦この状況に至るまでの回想を試みよう。そうすれば俺がこの状況に巻き込まれた要因が見つかるかもしれないし、物事を思考することによってパニックせずに済む。

——ということで回想だ。

いつも通り帰宅部の俺は放課後に訪れる暇をもてあましながら街中をぶらついていた。

生憎、友人達は皆揃って部活動に勤しんで今日は一人で学生らしくゲーセンなどで時間を潰していると、そこでたまたま頭と柄の悪そうなチンピラ達数名が一人の少女に集っている現場を目撃した。

少女の方は大体、十一か二くらいの小学生で、まあ客観的に見れば将来が楽しみな顔付きだ。

恐らくチンピラ達の目的はカツアゲかナンパのどちらかであろう。流石に後者だと引くが……いや、どちらも小学生相手にする行為でない事は確かだ。

つで、俺はというと当然スルー。漫画や小説などの正義感溢れる主人公なら普通は助けに入る所だろうが生憎、俺は主人公ではなく精々一般市民くらいのポジションなのだ。

それに下手にああいう輩に絡まれるのは御免だし、見ず知らずの小学生を助ける義務も持ち合わせちゃいない。

他の人間から見れば冷たい奴だと思われるだろうが、俺は面倒事には巻き込まれたくないんでね。

まっ、心配しなくても俺みたいなエキストラじゃなくて主人公クラスの間人間が表れて直ぐあの娘を助けてくれるさ。

俺は心の中でそう吐き捨ててチンピラ達と少女から視線を外そうとした時だった。

「……………」

視線を逸らす前に少女と目が合ってしまった。

しかもその瞳からは今にも滴が溢れそうで、捨てられた仔犬のように俺をロッキオンしている。

「……………げっ」

そして連鎖的に少女が向ける視線の先に居る俺をチンピラ達もロッキオンする。その表情は吐き気がする程、下品な笑みだ。

チンピラ達が少女を囲いながら俺に近づいてくるのを確認したと同時に思わずため息が出してしまった。

「……………オイオイ、マジですか」

だから面倒事に巻き込まれるのは嫌なんだよ

「ああ、もう最悪っ！」

既に日は沈み、子供達の声が聞こえなくなった無人の公園でブランコに股がりながら俺は吠えた。

最悪、今日という一日程この言葉が似合う日はなかっただろう。

あの後、案の定チンピラ達は俺に何かと因縁を付け喰い掛かってきたが、俺はそれになるべく”丁重に”撃退した。しかし、何故か

あの小学生は俺に助けられたにも関わらず俺がチンピラ達を撃退中にまるで鬼か悪魔でも見たかの表情を浮かべ半泣き状態で逃げ去ってしまった。

全く、けしからん。成り行きとはいえ、普通は助けられたのなら礼の一つくらいしていくものだろう。これだから近頃のガキは……

いや、礼をしなかったのは別にいい。

俺にとって一番の問題はあの喧嘩の現場を運悪く担任に見つかってしまったことだ。お陰でたつぷり絞られたのに加え一週間の停学処分までくらった。

勿論、俺も担任に経緯をちゃんと説明したが普段の学校での態度と、血塗れの木刀を振るいながら一方的にチンピラ達を痛めつけている所を見られてしまったので信じてもらえなかったのだ。

そして不貞腐れた俺はその足取りで近くの公園に行き、ブランコに乗りながら愚痴を溢す今に至る。

「はぁ……結局、一週間の停学くらって、残ったのはこれだけか」

俺は手にあるチンピラ達との戦利品である木刀を眺め、息を吐いた。因みにこれはチンピラBとの戦闘中に奪い去ったもので後のA、C、D、Eをこれで鎮圧させた。

「……そういえばこの公園、誰もいないな」

一通り愚痴と不満を吐き出し、少し気が落ち着いた時に俺は辺り

を見回してそのことに気付いた。

この公園は普段から人気がない場所だが、やはり夕暮れ時ともなると誰もいなくなる。

「……誰もいない公園って不気味だな」

そんな独り言を口にしたのは、この無人の公園から漂う独特の雰囲気不知所為だろう。誰も遊んでいない滑り台やブランコは何となく異質で、砂場の柵に施されている可愛いらしい筈の動物の絵はまるで俺を睨み付けてるような気持ち悪い錯覚に陥りそうになる。

——早く此処から離れよう

直感的に思考がそう警告した。なんだか分からないが妙に嫌な予感がする。

こういう時はその直感に従った方が賢明だ。

俺はブランコから降り、手に持った血塗れの木刀の処分に迷いつつ、流石にこの辺で捨てる訳にもいかないし帰りにゴミ捨て場にも捨てようと判断して、右手で木刀を持って無人の公園を後にしようとして足を前に踏み出した。

今になって思うが、これが俺にとって日常から非日常へと移り変わる最後の警告だったのかもしれない。もっと早くこの公園から離れていれば……いや、そもそもあの小学生と目が合っていなければ

俺は普段と変わらない日常を過ごせたと思う。

だが、そんなことを後から言っても既に遅い。

俺が公園の出口へと駆け出そうとしたその時にそれは起きた。

ドサッ……

突然の出来事だった。

『それ』は俺の進行を阻むような形で目の前に降ってきた。

「……………は？」

この余りにも唐突な出来事に対して俺が放った最初の言葉がそれだった。

俺の目の前で何かが降ってきた。まだ降ってきたものがハトやカラスのフンであればまだ許容範囲内だ。

だが、その降ってきたものはフンなんかじゃなく、人間だったら？

「……………アッ、アアア！！！」

降ってきたのは何故かパンツードの禿が目立つオッサンだった。しかもなにやら奇声を上げて瞳は焦点の定まらないままキョロキョロと動き、何かにしがき苦しんでいるように見えた。

「おい、アンタ大丈夫か……………！？」

普段ならスルーしていたかも知れなかったが、今回は別だ。明らかに様子がおかしい。いや、確かに秋にパンツ一丁でいるオッサンが降ってきたというのも十分おかしいが、そうじゃない。

「……………雪？」

オッサンの体には所々に雪のような粉が大量に付着していた。いや、正確には雪ではない。

遠目から見ればそれは灰色だった。しかも僅かにそれら全てが蛍のように淡い光を灯している。

「とりあえず、救急車を…………」

あの雪のような粉の正体が気になるが、今はとりあえず救急車を呼ぶのが先決だ。俺はブレザーの内ポケットから携帯を取り出そうとした。

「ア、アア、アアア！…………オ、オマエは…………！」

俺がポケットを探っていると焦点の定まっていなかったオッサンの両目が俺を捉え、それと同時に再び奇声を上げ、体は寒さを抑えようとするかのように震えだした。

「えっ、ちょっと、アンタ！ どうしたんだ？！」

その異常とも云える行動に俺は思わず近付こうとしたが、オッサンは『ヒィィ』と鳴くような音を出して距離を取るように後退りした。

「オ、オマエが、まさか、アの……ダス……と、……………」

その言葉を最後にオッサンが倒れた。

「おい、アンタ……！？」

倒れたオッサンに近付こうとした瞬間だった。オッサンに付着していた灰色粉がまるで動物の死骸に集る蟻のように動きだし、体が見るみる内に灰色に取り込まれていった。

「な、なんだよ……これ………」

灰色の粉が動きを止めた頃には既にオッサンの体はなくなっていた。代わりにそこにあったのは灰色の粉とは別の、骨灰のような白い塵が小さな山になって積もっていた。

「は、はは、なんだよこれ、夢か……？」

無意識に口から出たそんな単純な自問に、今の俺は答えられなかった。

あり得ない。こんな夢みたいな出来事はあってはいけない。

なんだよ一体全体、俺が何をしたって言うんだ？

いきなり人落ちてきたかと思えばそいつが灰色の粉に吞まれて塵になって……

「オイオイ、冗談きついつて………」

灰色の粉は再び動きだした。どうやら今度は俺が獲物らしい。

逃げ出そうという考えはもちろんあったが、遅かった。気付いた頃には灰色の粉は俺の周囲360度を霧のように覆っていた。

「ダスト」、埃か……はは、埃に殺されるのかよ、俺……」

あのオッサンが最期に言った言葉。多分、「ダスト」とはこの灰色の粉のことを指す名前だろう。

俺がこの王手^{チェック}の掛かった状況で出来るのは最早この出来事が全て夢だったというオチである事を願うくらいだ。

「クソッ……だから嫌なんだよ、面倒事に巻き込まれるのは」

その言葉を言った後に俺の視界は一気に灰色で塗り潰され、俺はそこで意識を手放した。

猫が招くは奇妙な出会い

今回ミナカと恋斗がここ、ターヘク地区に足を運んでいたのは任務の為であった。

任務、とはいっても前回のダムクライツのようなA級クラスの任務ではなく、とある貴婦人が飼っていた猫の搜索というE級の超低級難易度の任務だ。

内容を見ても分かるように今回の任務はミナカの記憶探しとは一切関係ない。と言うよりもこの任務はランクAのミナカが発注したのではなく、ランクEの最下位でありミナカのパートナー兼パシリの恋斗・タリナスがオーダーしたものだ。

何故、このようなE級の、しかも記憶探しとは全く関係のない任務を発注したかという、その理由はスキルランク制度におけるランカーに期せられたルールの一つである定期任務が原因だった。

定期任務とは、簡単に言えばスキルランクの定期審査だ。その目的は任務をこなさずスキルランクの特権だけを振りかざすランカー等が現れないようにする防止と、帝都に大量に寄せられている任務遂行の効率化だ。

そして内容は至ってシンプルで帝都から指定された、その者のランクに応じた任務をこなすというものだ。

因みに定期任務は予報の理由がない限りこれを拒否すればランカーの資格を剥奪され、一度剥奪された者は二度とランカーを名乗る事が出来なくなる。

そして今日がランクEの定期任務の日であり、恋斗は指定された猫探しの任務を受けていた。

蛇足だが、ランクによって定期任務の日にちは異なっていてランクAのミナ力は二週間ほど前にそれを終わらせていた。

猫探し、と聞いてミナ力はその余りにちんけ過ぎる任務の内容に最初、彼女は自分の耳を疑った。

いくらランクEの最下位だからってそれはないでしょ、というのがミナ力の感想だった。

そもそも、スキルランクとは”能力者でしか”解決出来ない事件を扱うのが本来の目的だ。だが、猫探し程度なら無能力者でも解決出来る。いや、それ以前にそんな下らない事をスキルランクに依頼する事態がお門違いというものである。

そしてミナ力が何より信じ難かったのは、そんなちんけな任務を定期任務に選ぶ帝都だった。

ランクAの自分の時はダムクライツ級のマフィアを制圧しろ、というのに対してランクEは猫探しというのは余りに理不尽ではないか、そう恋斗に愚痴を溢したら帰ってきた言葉は

「それは、俺が『無能力者』だからですよ」

だった。勿論、ミナ力はそんな理屈に納得がいく筈もなかった。

だが、実際に任務をやってみると確かにこれは無能力者がするに少し酷なものであった。何故かというと猫が目撃されたとされる場所が場所だったからだ。

帝都ターヘク地区。通称、『スラム』

北のセリナ、東のターヘク、南のフリグナ、西のラルティーナ、そして中央のローレの五つの地区で分かれる帝都の中で最も貧民窟であるターヘクはスキルランクの資格を剥奪された者のような、ならず者達が蔓延る治安の悪い地区だ。

何故こんな所に貴族の猫が迷い込んだのかは分からないが、日常茶飯事に能力者同士のトラブルが起こるターヘクに無能力者が出入りするのはいさすがに無理がある。だから帝都もこの任務をランカーに任せたとあろう。

「……はあ、ミナカさん、そんなに機嫌が悪くなるなら先に帰ってもいいんですよ？　そもそも、定期任務は受けた本人が一人でしなきゃいけない訳ですし」

「な、何よ！　別に機嫌が悪い訳じゃないわよ！！
それにアンタみたいなひ弱そうな奴はここに居る連中のカモにされやすいから、仕方なくランクAのこの私が付き添ってあげてるんじゃない！」

「いや、ミナカさんが俺を心配してくれるのは嬉しいですが、さっき一番街でナンパされてから随分と機嫌が悪いじゃないですか」
「別にアンタの心配なんてしてない！！」

まだ昼間の時間帯にも関わらず夜のような薄暗い雰囲気漂わす日の光が届かない路上。猫の目撃情報があったターヘク地区の二番街に通りがかった辺りで恋斗は苦笑しながら不機嫌そうに隣を歩くミナカとそんな会話をしていた。

ミナカが不機嫌なのは恋斗が話した通りターヘク地区に入って早々、いきなりナンパにあったからだ。治安の悪いこの場所ではそんな事は当たり前のように起きるのだが、問題はそこじゃない。

絡まれたのがミナカではなく恋斗だったのだ。つまり逆ナンだ。

ミナカ自身も彼女の性格を知らない者なら道行く人が何人も振り返るような可愛らしい整った顔立ちをした美少女だが、恋斗・タリナスはある意味それ以上の容姿だった。

灰髪という非常に珍しい色をした短髪に、一見すれば美男子とも美少女とも見れる、おそろしいくらいに中性的で整った顔。一度見れば直ぐ様、脳裏に焼き付くほどのその姿は見ていただけで本当に自分と同じ人間かどうか疑ってしまうような、ある意味で特異な容姿だった。

その所為か、ターヘク以外の場所でも恋斗は何度も逆ナンされた経験があり、その度に隣に居るミナカは恋斗に集る女共とそれに苦笑しながら照れる馬鹿見て怒りのボルテージがぐんぐんと上がっていく。

さっきの逆ナンも場所が場所の所為か、いつもよりもしつこく絡んできた為、ミナカも耐えきれず能力を使って追い払ったのだが、それ以降の彼女の機嫌は時間が経つ度に悪くなっていったのだ。

「まあでも、ミナカさんと二人だとああいっ輩に絡まれる回数が一人の時と比べて一気に激減しますから助かりますよ」

「フンッ、何よそれ、まるで私が魔除けみたいな言い方じゃない」

何を藪から棒に、と頬をポリポリと掻きながら言う恋斗にミナカ

は睨み付けるような視線と共に言葉を返した。すると、恋斗は『いえいえ』と首を振ってそれを否定し、ミナカの方を向いてニコツと笑みを浮かべた。

「ミナカさんが隣に居ると、俺達の関係が恋人同士か何かに見えたから絡まれる回数も減ったんだと思いますよ？」

あまりにもあっさりとした様子で口にした恋斗の言葉を理解した時、ミナカ・イルピリスの時間が止まったかのように彼女の動きが停止した。

「……こ、こ、こ、恋人同士……？ わ、私と……れ、れ、恋斗が……？」

金魚のように口をパクパクさせながら言われた言葉の意味を繋いでいくミナカ。彼女にとって恋斗の言葉は想像以上の威力を秘めた兵器だった。その証拠に彼女の顔は一気に赤く染まり、今にもオーバーヒートしそうな勢いだ。

「あゝ、でも恋人同士とは限りませんね、ほら俺達って似てませんけど年齢差を考えれば兄妹に間違われるというのも有り得ますし……って、ミナカさん？」

「恋人同士……私と恋斗が……恋人同士……私と恋斗が……兄妹同士？ それもいいかも」

ぶつぶつと呟いているミナカの言葉を恋斗はちゃんと聞き取れなかったが、こんなにも顔が真っ赤だと熱でもあるのではないかと原因を作った張本人は勘違いをし始め、その場で立ち止まっているミナカの正面に立った。

「ミナカさん、ちょっと失礼しますね」

「私と恋斗が……って、ひゃあ!？」

未だにぶつぶつと言っていたミナカにそう一声掛けると、恋斗は少し屈んでミナカと自分の身長を合わせ、そして優しくミナカの前髪を上げて彼女と自分の額をくっ付けた。

「うーん、熱はないみたいです……って、さっきより赤くなってるじゃないですか!？ 大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫、だから……は、早く……」

恋斗の大胆とも言えるその行動にミナカはもはや沸騰間近、いや既に沸騰しているんじゃない？ というくらいに赤くなっていた。

「……早く？ 早くどうすればいいんですか!？」

自分が原因を深めているとも知らずにますます赤くなっていくミナカを前に焦りを増していく恋斗。
そんな彼にとうとうミナカはキレた。

「いいから早く離しなさいよ、この変態恋斗!!」

バチンッ！ と強烈な音が薄暗い路上に響いた。

ミナカの風を纏わせた平手打ちが恋斗の頬を打ち付けたのだ。

「ハア、ハア……何でアンタはいつもそうやって私を……」

ミナ力は肩で息をしながら呼吸を整え未だに赤い顔のままで、地面に涙目で横たわる恋斗^{バカ}を睨み付けた、その時。

みゃー

「！今の鳴き声は……！」

目の前にある石造りの建物の間から見える路上裏から今回の任務の標的らしき鳴き声が聞こえた。

「どうやらあっちから聞こえたようですね」

さっきまで地面に転がっていたのがまるで嘘かのように平然とした立っていた恋斗は言い終わるのが先か、路上裏への道へ駆け出して行った。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ、恋斗！」

走り出した恋斗の背中を見てミナ力も彼を追うように路上裏へと入り込んだ。

ただでさえ薄暗いターヘクの路上裏となるとそこは完全に夜の世界が広がっていた。表通りから僅かに差し込む光を頼りに二人は汚い地面を蹴って闇へと潜ってゆく。

そしてようやく闇の世界を抜け、目標が居るであろう路上裏の先に着いた時、恋斗・タリナスは目の前の光景に思わず足を止めた。

「？なに突っ立ってんのよ、ターゲットは見つか——」

路上裏の出入口で棒のように立ち止まる恋斗にミナ力は疑問を抱き、そう言いながら彼の視線が釘付けになっているものを見た。そして言葉が途切れた。

そこはゴミ捨て場のようなやや広い場所だった。広場の周囲の地面はガラクタ達が数えきれない程転がっており、真ん中には原型を留めていない鉄屑や壊れた家具等で積み上げられた瓦礫の山が聳え立っていた。

そして二人の視線が釘付けになっていたのはその山の頂きに埋もれる一人の少年だった。

黒髪黒眼の東の国特有の姿をした彼の格好はミナ力達から見ればかなり異質なものだっただけで、

着ている服装はまるで貴族がパーティーで着用するような礼服に似ている。だが、緩んだネクタイやボタンが全開になった上着、手に持つ血の付いた木刀を見る限り彼が貴族でない事が見てとれる。貴族が普通こんな格好をする筈がないのだ。

だが、二人が釘付けになっているのはその奇妙な格好についてじゃない。彼の顔についてだ。

「……れ、恋斗が二人居る？」

固まっていたミナ力からやっと出た言葉だった。

さっきも説明した通り、恋斗・タリナスの容姿は特異である。その意味通り”他とは違う”のだ。

なら、何故目の前にその”他とは違う”顔と同じ少年が居るのか？

ミナカは目の前の少年と見比べるかのように隣に居る恋斗に視線を移した。

「ハハッ、これは驚きましたね……」

そう苦笑を漏らす恋斗の表情は傍目からすればいつも通りの笑みに見えたかも知れない。だが一年半の間、行動を共にしてきたミナカには彼の目が今までにないくらいに驚愕の色に染まっている事がわかった。

どうやらこの様子を見る限り恋斗は目の前の少年と知り合いではないようだ、とミナカは判断して視線を再び山の上の少年へと戻すと少年の方も何やらこちらを見て呟いていたようだが、ここからは聞き取れない。そしてその後に関心考え方をするかのように額に手を当て数秒後、少年は呟えた。

「だア！ クソッ！ 回想しても何も分かんねえじゃねえか！！」

バリバリという効果音が付きそうな勢いで頭を掻きむしる少年に恋斗とミナカは啞然とした様子で黙っているしか出来なかった。

だがそんな時、山の上に居る彼の足元で”みゃー”という鳴き声が聞こえた。

「……………ねこ？」

怪訝な顔をしながら片手でそれをつまみ上げた少年を見て、恋斗はハッとして今回の任務のターゲットを思い出した。

「あゝ、すみません、その猫、こちらに渡してくれませんか？」

「……………はっ？」

これが同じ顔をした二人の少年が交わした最初の言葉であり、奇妙な出会いの始まりだった。

■最近の学生はすぐキレる（前書き）

感想や訂正箇所、その他なにかありましたら指摘のほう、よろしく
お願いします。

最近の学生はすぐキレル

例えば、この物語の脚本が突如異世界に飛ばされた主人公が世界の平和を脅かす魔王を倒す勇者となって旅をするようなテンプレ的な内容ならまだ納得が出来たかも知れな……いや、やっぱ納得できねえな、こりゃ。

でもさ、RPGと言えば、可愛いヒロインや頼もしい仲間達を連れて迫り来る刺客に四苦八苦しなから魔王打倒へと向かうような王道的な物語がやはり頂点だと思うんだ、俺は。

最近のRPGはどうも無駄にひねりを入れた内容の物が多いが俺はそんなのよりも主人公が何も喋らず『はい』か『いいえ』かの二択しか選ばない、ちよいと古臭いRPGの方が好きだ。四の五の言わずにただ黙々と運命に従って世界を救う、そこに二択主人公という独特の美徳があると俺は思うんだ。

……でっ、要するにさっきから何が言いたいのかと言えば俺は王道が好きだって事だ。

つまり、魔王や魔物の居ない地球と殆んど生態系が一緒な異世界に飛ばされて、何の特殊能力も持たない喧嘩と体力以外能力値が一般ピーポー以下の俺が主人公の物語なんて俺にとっちゃクソゲー以外の他でもないってこと。

悪いがそういうのは誰か他を当たってくれ、そもそも俺に主人公なんて大役は不釣り合いだし。

大体、さっきは王道的な内容の方が好きだと言ったが、プレイヤーになるのとキャラクターになるのとじゃ話は別だ。あくまでそういうのはゲームや漫画の中だけで十分なんだよ。

だから俺をもとの場所に帰してくれよ、出来れば停学期間の一週間以内で……

未だこの状況に頭がついていない学生だったが、とりあえず自分とそっくりさんである灰髪に言われた通り猫を渡した。そしてそのついでに学生はそっくりさんの灰髪に自分はこの辺の地域に詳しくないから少し大通りまで道を案内してくれないか、と頼んでみる事にした。

この薄暗い路上や、周りにある石造りの建物等は自分住んでいた地元どころか、ホントに日本かどうか疑いたくなる風景だが、ここがどんな場所であれ余程ぶつとんだ所じゃない限りはタクシーでも拾えば帰れるだろう。幸いにも雑魚を倒した際に財布を十分に潤せたので資金面は問題ない、そんな考えがこの時点ではまだ学生の頭の中にあつた。

思いのほか、そっくりさんの灰髪は自分と対象的な性格をしていたようで二つ返事でそれを了承してくれた。因みにそれを聞いて灰髪の隣にいた西洋風の顔立ちをした金髪少女が何やら不服そうな表情をしていたが、どうにか灰髪がそれを巧く丸め込んで納得させていた。

チンピラ共に喧嘩を売られ、一週間の停学を喰らい、空からパンツ一丁のオッサンは降ってきたかと思えば、灰色の奇妙な埃に襲わ

れ、気付けば見知らぬ場所で、目の前には可愛い子ちゃんを連れた自分のそっくりさん……全く奇妙な一日だ、こんな日は早く寝るのに限る。帰ったら即ベッドにダイブしよう。

灰髪たちに道を案内されながら学生は今日起きた一連のイベントに苦笑しながらそう思いつつ、無意識に手に持った木刀を見て『さっきの所で捨てるときやよかったな』などと軽くため息を吐いた。

だが、案内されて着いた場所に学生はまだこの奇妙なイベントが終わってない事を嫌でも思い知らされることになった。

「……………えっと、つかのことお訊きしますが、ここって日本デスカ？」

普段絶対に使うことのない敬語が学生の口から思わす飛び出た。語尾がカタコトになっているのはこの光景が彼にとって余りにも衝撃が大きかった所為であろう。

信じらんねえ……だってこのご時世に馬車が普通に走ってるんだぜ？

「ニホン？ 大陸外の国ですか？ すみません。俺、大陸出身なのなんで大陸の外の国の事はあんまり詳しくないんですよ」

ふざけた様子もなくただ真面目にそう答えた灰髪に学生は疑うかのような眼を向けた。

日本を知らないだと？ ふざけんな。じゃテメエが今使ってる言語はどここの国の言葉なんだよ。

それとも自分が無意識の内に灰髪たちの言語を脳内変換して日本語として聞き取っていたとでも言うのであるのか？

いや、ありえない。英、国共に万年欠点の自分がそんな神業的なスキルを所持してる筈がない。それなら日本語が自分の知らない内に世界共通言語になっていたという仮説を立てた方がまだマシだ。

いや、っていうか大陸外ってなんだよ。

「なあ、一応聞いておくが、ここって何て言う国だ？」

「はあ？ アンタさっきから何言っんの？ ここは帝都ラフラ・ローレじゃない。因みにアンタがさっき居たのが東部のターヘク地区、それで今いるのが北部のセリナ地区よ」

痺れを効かしたかのように若干、イライラした口調で金髪少女が代わりに学生に答えた。

「全く、アンタ見たところ東の出身みたいだけど、帝都ミナトに来るんだつたらせめて土地ぐらいは覚えておきなさいよ？ さっきのターヘクなんて地元の人間でも迷う事がある地域なのに」

腰に手を当て、叱るようにそう言葉を続けた金髪少女だったが、学生の方は殆んどそれを聞いてはいなかった。

日本を知らないと言った灰髪の言葉に、ここが少なくとも日本ではないと予測はしていたが、まさかここまで予測の遙か斜め上を行くものだとは思っていなかった。

ていと、らふらろーれ？ なんじゃそりゃ、まるでRPGに出てくるラスボスが城建てて構えてそうな街の名前じゃねえか。

「はは、こりや、笑うしかねえな……」

力の抜けたような渴いた笑いを発しながら学生は灰髪にそう返して改めて目の前に広がる光景を見た。

薄暗い路上を出て現れたのはまるで中世のヨーロッパを思わせる煉瓦や石造りの建物が並ぶレトロな街並みだった。

大きな通りには馬車が往き来し、威勢よく声を上げて酒場に客を呼び込む中年の男性や会話を楽しむ娘、街中を杖を付いて歩く老人まで道行く人全員が学生が普段見ることのない色彩溢れる髪の色や瞳をしているその光景は間違いなく彼の知る日本では見れなかった。

「ハア……何がどうなつてやがるんだか……」

「誰かー！！ その人を捕まえてー！！」

頬をつねつても醒めないこの夢幻にもはや諦めすら籠ったため息を吐いて学生はとりあえずこれからどうしよう？ と考えていると通りの向こうから食材のようなものが入って紙袋を抱き抱えた男とそれを追うメイド服を着た若い娘が走って来た。

「……何だア？」

「どけえー！！」

「グヘツ！？」

声の方向に振り向こうとした時、学生は走って来た紙袋を抱えた男に突き飛ばされた。

「あつ！ 恋斗さんにミナカちゃん、ちょうどよかった、あの人を捕まえて下さい！」

「どうしたの？ 睦月」

「さっきあの人にマスターに頼まれて買った食材を盗られたんです」

突き飛ばされピクピクと地面で体を震わす学生に気付いていないのか、急いだ様子でメイド服の娘は灰髪と金髪少女にそう話した。

「成る程、そういうことですか、ミナカさん頼みました」
「わかってるわ」

灰髪はそう金髪少女に言うつと少女は右手を走って行く男の背中に向けた。その時、

「吹き飛びな——」

「っざけてんじゃねえぞ、ゴラアアアアああ！！！！！」

地面に倒れていた学生がこめかみを激しく痙攣させながら勢いよく立ち上がり獣の如き猛りを上げた。

その瞬間、ピタリ、と全ての音と動きが停止したかのような錯覚が辺り全体に染み渡った。

ニコニコを浮かべていた灰髪はその表情がピシャリと固まり、右手を男の背中に向けていた金髪少女は腕を垂らして学生の顔に視線を移し、メイド服の娘はオロオロと体を震わせた。

突如として響いたその怒声に逃げていた男は思わず紙袋を落とし

そうになり、そして興味本意で恐る恐る後ろを振り向いた。

——そこには鬼のような目をした悪魔が立っていた。

「こちとら今日は、色々とハプニングが多すぎて頭ン中で処理しきれてなくてパンク寸前なんだよ、今にもブッチーンてイッチまうくらいに」

学生は口元を三日月のように歪めてただ静かに笑っていた。

「だからさア、今はちょーっと肩がぶつかって謝んなかったくらいでソイツを八つ当たりと称してボッコボコにしちまうほど頭がキテルんだよ、俺は」

血で赤く染まった木刀を手に学生は一步、また一步と紙袋を持った男へと距離を縮める。

「く、クソ！ こっちにくんじゃねえ！！」

「危ない！ その人は能力者です！」

紙袋を抱えた男が学生に片方の手のひらを差し出したのを見て灰髪が咄嗟に声を上げた。

「ハッ、喰らつとけ！」

言葉と共に男の手から木刀サイズの氷柱が三つ連なって発射された。

ヒュン、と風を切る音を立てながら学生に勢いよく向かう氷の刃に灰髪はもうダメだと思った。

だが、学生の方はそんな灰髪の事など知るよしもなく、ギョツと木刀を握る手の力を強めた。

「聞こえなかったかなア？　今の俺はとオっても機嫌が悪いんだぜ？」

パリン、パリン、パリン、とまるでワイングラスを床に叩きつけて割ったような音が三回立て続けに響いた。

「な！？　今アイツ、木刀で全部叩き割った……？」

まるで信じられない光景を目の当たりにしたかのように金髪の少女が言葉を漏らした。

学生のとった行動は至極単純な事で、ただ木刀を降り下げ、降り上げ、そして再び降り下げただけだ。

だがそれら全ての木刀の軌道が恐ろしく疾く、尚且つ氷柱の腹の部分を正確に捉えていたのだ。

「オイオイ、こりゃガチでファンタジーだな、今のは何だ？　ブリザドか？　それともマヒヤドか？　まっ、どっちも今は同じメーカーだな」

叩き割られた事によって地面に散らばった氷柱の破片に鋭い眼光を向けながら学生はそう言い捨てた。

普段の彼ならこの魔法のような現象に驚愕していたかもしれないが、些か今の彼には”常識”という枷が思考から外れかかっているようだ。

「な、なんなんだよてめえは!？」

目の前の少年に木刀なんかで自分の能力を防がれた事により自尊心を打ち碎かれた男は後退りしながらも再び氷柱の刃を学生へと向けて何度も放った。

「なにつて、ただの学生さ」

表情を一ミリも変えずに迫り来る氷柱をまるで蚊を払うかのよう
に叩き割って再び男の方へとゆっくり歩を進める学生。

「ただなア、最近のキレる学生を止めるのにそんな低級魔法じゃ、
ちつとばかり役不足だ」

何度も何度も木刀という情弱な武器で己の能力を無効化され、と
うとう男は紙袋を置いて逃げ出してしまった。その様子は肉食獣に
食われんと必死に足掻く草食獣のようだ。

すると学生はそんな男の背中を確認して木刀を野球のバツターのよ
うに構え始めた。

「今の俺を止めたきや^{アルデマ}究極魔法でも唱えやがれ、この似非魔導師が
ッ!」

ビュン! と木刀をフルスイングして真横回転をかけて飛ばし、
勢いよく宙を舞ったそれは見事に男の後頭部に直撃した。

「あゝスッキリした……でもこれからどうしよう」

「……………」

一連の出来事に開いた口が閉まらない状態の灰髪と金髪少女とメ

イド服の娘を他所に学生はポリポリと頭を掻きながら疲れるように
息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5071f/>

最弱の強者

2010年10月26日01時11分発行